

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-08-22

井坂義雄元常務理事オーラル・ヒストリー： 法政大学史資料集第42集

KOBAYASHI, Fumiko / KITAGUCHI, Yumi / TAKAYANAGI, Tosio /
ISAKA, Yosio / 北口, 由望 / 小林, ふみ子 / 高柳, 俊男 /
井坂, 義雄

(出版者 / Publisher)

HOSEIミュージアム

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEIミュージアム紀要 / BULLETIN OF HOSEI UNIVERSITY MUSEUM

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

77

(終了ページ / End Page)

130

(発行年 / Year)

2024-03-13

III 資料編

法政大学史資料集

第42集

井坂義雄元常務理事オーラル・ヒストリー

目次

井坂義雄元常務理事オーラル・ヒストリー

第1回 2022年7月6日

第2回 2022年9月6日

2024年3月

法政大学史委員会編集

『法政大学史資料集』は1978年3月に法政大学百年史編纂のため刊行がはじまり、大学の歴史に関する資料集として古い歴史があります。百年史完成後も大学史の解明のために刊行が継続され、2021年3月刊行の第39集以降は『HOSEI ミュージアム紀要』に収録されています。

解題

法政大学史委員会

高柳 俊男

大学史委員会では、来たる2030年の創立150周年に向けた準備の一環として、過去に総長や常務理事を経験されたご存命の方々からヒアリングをしてまとめる作業を、5年前から進めている。下森定元総長、川上忠雄元常務理事、石坂悦男元常務理事に続く今回のオーラル・ヒストリーでは、第一教養部の部長を経て常務理事に就任した、井坂義雄先生にご登場いただいた。

記録冒頭に記されている通り、聞き取りは2022年度に、前後2回にわたって大学にて行われた。本文末に掲載されている「略歴」に従って、1938年の出生や法政大学の各教育機関で学んだ学生の時期から始めて、1973年の専任教員就任後の諸活動について幅広く伺っている。学生・院生の立場から教員への転換、所属した第一教養部という、学内最大の教員組織でありながら、専門学部からは「格下」の存在にみられがちな組織の内部事情、全法政と新法政という複数存在する教職員組合の相互関係、校友会内の不祥事、文学部同窓会の立ち上げなど、内容は多岐にわたる。

その中で中心となるのは、やはり第一教養部長の時期（1990.5～92.3）と、阿利莫二総長および下森定総長のもとで常務理事の重責にあった時期（1993.5～96.4）、そしてその前史に当たる経済学部・社会学部の多摩移転（1984年）や、法政懇話会（1989年～）の頃であろう。学生運動が全国的に盛り上がったのは1960年代後半から1970年代初頭にかけてだが、本学の場合、その余波はその後も長く続き、大学として種々の対応を迫られた。本記録でも、ときに暴力的な学生運動との対峙、運動学生と大学側との奇妙な内通、学生会館や学生寮（府中寮）問題、飲酒（一気飲み）による死亡事件、閉門によるキャンパスの閉鎖状況の改善なども含めて、学生問題全般が様々に取り上げられている。

また、学生対応だけでなく、教員組織内部にも大きな対立や齟齬があり、とくに主に低学年で行う教養教育を教養部が全学一括で所轄するか、各学部が自前で担当するかという、いわゆる「タテ・ヨコ問題」は、教養部の人事権とカリキュラム権が絡み、一部学部の多摩移転後も長期間にわたって焦眉の課題として存在した。ほかに、市ヶ谷再開発、入試改革（あしなが入試、地方入試の導入）、新学部設置、通信教育の充実などの課題も横たわっていた。

この聞き取り記録では、そうした複雑な学内情勢の中で、井坂先生がどのような立場で、どのように役割を果たしたか、その苦闘ぶりが個々の教員の個人名も挙げながら生々しく語られている。もちろん、本学にはすでに法政大学戦後五〇年史編纂委員会による『法政大学と戦後五〇年』（2004年）という優れた大著があり、大学当局や教授会、一部教員組織が発表した各種の声明文をはじめ、残された多くの資料に依拠しながら、当時の状況が克明に綴られている。したがって、今回の井坂先生の聞き取りは、最初は学生・院生、その後は教員として、激動の時代を本学で過ごしてきた一個人の証言として、同書や、本紀要で3回連載してきた他の総長・常務理事の証言とも対照しつつ、それらを補完するものと

して読まれるべきであろう。

近年、いったん郊外に移転した学部を中心部へ回帰させる動きが各大学で起きている。将来、本学でも同様な再移転が実行された場合、移転学部の教養科目をめぐって、市ヶ谷の既成組織との間でまた新たな火種が発生する恐れがあるかもしれない。当時の両キャンパス間の交渉や調整（妥協案の策定）に携わり、常務理事として多摩移転後の市ヶ谷再開発の課題にも関わった井坂先生の証言は、その意味でも示唆に富むものであり、今後の動向も視野に入れつつ参照されることが望ましいと言えよう。

過去3回のオーラル・ヒストリーと異なるのは、井坂先生が法学・経済学・社会学などの社会科学の専門家ではなく、文学部でアメリカ文学を専攻した人文系の学者であり、第一教養部を母体に理事に就任した点である。ライフワークとしたアメリカの小説家ホーソンの研究は、『ボストン随想：ホーソン文学によせて』（桐原書店、1984年）『ホーソン文学の形成期：Twice-told talesの世界』（旺史社、1986年）『セイレムの若き文人：「陰鬱な部屋」のホーソン』（南雲堂、2013年）などにまとめられている。文学創作への意欲が垣間見られる初期のショートショート集『逃げた白鳥：文学的デッサン100篇』（栄光出版社、1971年）や、聞き書きでも語られている日中合同法政大学タクラマカン沙漠調査に関して『タクラマカンの私的広がり』（近代文芸社、1997年）があるほか、ホーソンやヴァン・デル・ポストなどに関する訳書も複数出版されている。

今回、責任者として聞き書きを担当した私自身は1999年、第一教養部に所属していた教員たちが母体となって国際文化学部を新設した際、既存のメンバーではカバーできない特定のジャンル（朝鮮語）の教員として本学に着任し、井坂先生と同僚となった。それから2008年度末で定年退職されるまでの10年間、学部と追って開設された大学院で、ともに教育研究活動に従事する中で、さまざまご教示をいただいた。この聞き書きでも、井坂先生の女性や弱者への温かい視点が話題にされているが、温厚で控えめな性格で、言葉を選びながら訥々と語る姿や、ウズベキスタンとの学術交流に尽力されたこと、学部紀要『異文化』に戦争体験の継承やシベリア抑留についてほぼ毎号執筆されたこと、などがとくに印象に残る。井坂先生が受け入れた大学院生を、退職後に私が引き継いで指導を続けた場合もあった。

とはいえ、東京から新潟へ縁故疎開し、戦後もしばらくそこで暮らしたこと、父親を早くに喪い、高校も法政大学第一工業高等学校（麻布校舎）という、夜間の定時制で理科系の勉強をしたことなど、若き日の歩みやその中でのご苦勞については、今回の作業を通じて初めて知ること多かつた。大学運営とはまた異なる部分の語りも、「人間 井坂義雄」の生きた記録として心に残る。ヒアリングの末尾で、新設の国際文化学部で教員として在籍することの意味や覚悟について、私と同じような考えでいらしたことを確認できたのも有難かつた。

最後に、お忙しい中、薄れがちな過去の記憶を甦らせつつ、文字にしにくい微妙な問題や裏話も含めて率直に語ってくださった井坂先生に、心から感謝申し上げたい。同じ話題を重複して聞いていたり、記憶違いからのちに前言を訂正している箇所もあるが、受け答えのニュアンスや語り口を生かす意味から、あえて整理していない部分があることをお断りしておきたい。

井坂義雄略歴

- 1938年 東京都生まれ
- 1960年3月 法政大学第一工業高等学校卒業
- 1960年4月 法政大学文学部英文学科（二部）入学
- 1965年3月 法政大学文学部英文学科（二部）卒業
- 1965年4月 法政大学人文科学研究科英文学専攻修士課程入学
- 1970年3月 法政大学人文科学研究科英文学専攻博士課程修了
- 1971年4月 法政大学第一教養部兼任講師
- 1971年4月 芝浦工業大学専任講師（1973年9月まで）
- 1973年4月 法政大学第二教養部兼任講師
- 1973年10月 法政大学第一教養部専任講師
- 1974年4月 法政大学第一教養部助教授
- 1977年4月 法政大学第一教養部教授
- 1990年5月 法政大学第一教養部長（1992年3月まで）
- 1993年5月 法政大学常務理事（1996年4月まで）
- 2000年4月 法政大学国際文化学部教授
- 2009年3月 法政大学を定年退職
- 2009年4月 法政大学名誉教授

井坂義雄元常務理事オーラル・ヒストリー 第1回



開催日 2022年7月6日(水)

場 所 法政大学九段北校舎4階第二会議室

出席者 井坂 義雄(法政大学元常務理事)

高柳 俊男(法政大学国際文化学部教授)

小林ふみ子(法政大学文学部教授)

北口 由望(法政大学HOSEIミュージアム学芸員*当時)

目次

1. 法政大学第一工業高校入学・卒業
2. 学生時代
3. 法政大学の教員になって
4. 中村哲総長の時代
5. 研究科紀要・雑誌の創刊
6. 学生運動の時代
7. 新法政と全法政
8. 第一教養部の動向
9. 卒業生組織
10. 阿利莫二総長の時代
11. 法政懇話会
12. 新学部の設置に向けて

1. 法政大学第一工業高校入学・卒業

高柳 事前打合せの際に、お生まれになってから法政の教員になるまでのお話を中心に伺っていましたが、ヒアリングの中心は教員として、特に本学の改革などにどう関わったのか。何と云っても第一教養部(一教)の部長、それから理事という大きな仕事の中でどんなことをされたのかというあたりになります。

確認のために、お生まれが1938(昭和13)年の東京の小石川区で、空襲などが激しくなる時期にお祖父様の故郷の新潟県の当時の六日市村、今の小千谷市のほうに疎開をされて、そのまま新潟で小学校、中学校を卒業された。その間に、復員してきたお父様を早く失うという経

験もされたわけですが、1年ぐらいお仕事をした後、1956（昭和31）年度から法政大学の第一工業高等学校で理科系の勉強をされた。それは、モールス信号を身につけて世界の海を渡りたいというご希望を持っていたということで入学したわけですが、大学の学部はいわゆる文科系ということで、これは先生の影響もあったようですが、本学文学部、二部の英文学科に入っただけで、例えば意味論やホーソーンなどを研究されて、大学院、修士、博士と進学されました。教員の就任は、1971（昭和46）年に第一教養部の兼任講師、同年芝浦工業大学にも専任講師としてお勤めになった後、1973（昭和48）年10月から法政大学の専任講師、さらに助教授、教授となり、定年まで法政大学で教えていらっしやうと伺ったと思います。今のところで間違っていることはありますか。

井坂 間違っておりません。

小林 この事実の中で、先生の人生において重要なことやご経験はありますか。

井坂 第一工業高校を卒業した時でしょうか。第一工業高校に入る時から勤めていた飲食店の店主さんは今でいえば教養のある方だったと思います。高校を卒業した時に「大学に進学できる資格がある」と言われましたが、何を思ったかわかりませんが、嫌になって、店主のところから夜逃げみたいにして逃げてしまいました。当時、独身はみな柳行李みたいなものに自分の衣類とかを全部入れていましたが、2つぐらいあった柳行李を店主のところ置いて逃げたものですから、取りに行かなければなりません。そして取りに行ったところで店主に、「黙って逃げるとはけしからんじゃないか」と説得されて、結局、戻りました。やはりその方

に惹かれていたんだと思います。「学校へ行かなければ駄目だ」というのを最初から言われていたものですから、それで大学に進学することになったという経緯がありました。その出会いはやはり大きいですね。

高柳 『文学部同窓会報』に載った「麻布校舎（一工校）で学んだころ」のところで、「恩人ともいうべき」という表現をされていましたよね。まさに、学ぶことの大切さなどを教えてもらったことや学校に通うことを積極的に応援してくれたことが書かれていましたね。

北口 父兄会にも参加して下さって、親代わりのような存在だったとか。

井坂 そうですね。あまりないケースだと思います。担任の先生からいろいろ話を聞きました。ご本人も、三商と呼ばれていた（府立）第三商業学校を卒業した頃、空襲にあつて、17歳くらいの時に、同級生の半分ぐらいは亡くなったと聞きました。その後、築地に引っ越ししたりして、外濠の向かい側にある理科大（東京理科大学）、当時は「東京物理学校」という学校名で、そこに入学したらしいんですが、戦乱の時ですからあやふやになってしまったそうです。そういった経験があるから「勉強しろ」と言っていたんでしょね。「勉強しなきゃ駄目だ」という言葉は、今でも痛切に耳に響いています。

高柳 事前打合せでは、この方はガンジーに傾倒していたとかおっしゃっていたような気がします。

井坂 そうですね。

小林 今の感覚からすると、先生はご苦労なさって学問をされたと思いますが、当時の法政大学は、苦労して学ばれている学生が多かったですか。

井坂 二部の学生にそういう人が多かったように思います。あまりいい言葉ではありませんが、大学を出た人がまた法政に入ってきて、いつか一旗揚げるといふ気概のある人が私の周囲にはたくさんいまして、話が弾みました。

小林 ハングリー精神ですね。

高柳 私が研究している在日韓国朝鮮人の歴史の中でも、法政はけっこう在日の人が多くて、あまり言えないのかもしれませんが、密航者でも受け入れてくれるような存在であったようです。尹（学準）先生もそうですが、法政は密航者が入りやすい大学みたいということで、仲間内では知れ渡っていたようなところがあったようです。

北口 疎開をして、疎開先から東京に来て法政大学第一工業高校に入学する、その経緯を簡単にお話いただけますか。

井坂 何か学びたいという、モールス信号を身につけたいという気持ちがあつて、そこから電気を学びたいという発想がありました。3ヵ月しかいませんでしたが、駒込の工場に勤めていたことがありました。みな二十歳前の若者で、仕事が終わってから、勉強するならどうのこうのという話をしたりして、新聞の求人欄を持って来るんです。「どこかいいいところはないか」といろいろ探していた時に新聞配達の仕事を見つけました。今でもその誘ってくれた兄貴分の人は、永峰という人で覚えています。 「じゃあ、一緒にここへ行ってみようか」ということで、恵比寿駅から広尾に行く途中にあった読売新聞の新聞店に行きました。けれども、伺ったら、一人しか採用しないというんです。そうしたら永峰が、「いや、私はいいですから、こちらをどうぞ」といって、私を前に出してくれま

した。そういうことがありましたね。

新聞配達も3ヵ月しかやらなかったと思いますが、けっこう学ぶ人がいました。当時、上智大学に通っている学生さんがいて、僕はその頃まだ知らないから、「上智」というのを「あげち」と言ったら、「いや、じょうちだ」と言われて（笑）。やはりその時も、「勉強しなきゃ駄目だよ」と励ましてくれました。そんな善意に恵まれましたね。決して、「勉強なんかしてもつまらない」ということは聞いたことがなかったです。わりあいに学生とか、学ぶ人を社会が受け入れてくれた時代だったのかもしれませんが。例えば、高等学校で旅行をしますよね。そうすると、旅館なんかでも「学生さんが来た」というので、仲居さんなんかがとても丁寧にもてなしてくれました。そわそわして迎えてくれたのを今でも記憶しています。学生を大事にしてくれた時代でした。

小林 今とは、エリート感が違うんですね。

高柳 数も違うでしょうね。

小林 進学率がどんどん伸びた時代ですもんね。

井坂 そうですね。私は、今でも覚えていますけど、入学式か卒業式の時の、谷川（徹三）総長の祝辞か何かの時に、「かつては100人に1人が大学生人口だったのだけれども、今は10人に1人になった」という話をされていました。

小林 当時は、10人に1人の時代ですもんね。

井坂 まだ10人に1人の時代でした。

高柳 1963（昭和38）年ぐらいですよ。

井坂 そうです。10人に1人になったというのは、本当によく覚えていますね。ところが、その後2人に1人になってきて。

高柳 ご存じのとおり、特に女性の割合がとて

も高くなりました。

井坂 高等学校の入学、それから卒業の時のそういうことが印象に残っています。いずれも、自分の運命を左右するような出来事として覚えていますね。

高柳 高校に通っている途中で文科系に、英語とかそういう方向に変わっていくわけですよ。

井坂 そうですね。

高柳 御崎善六先生の影響が非常に大きかったとお聞きしました。

井坂 はい。自分も教壇に立ちましたが、先生方はやはり影響が大きいですよ。ちょっとした話でも学生を引きつけるんですよ。例えば、御崎先生は必ずしも背が高いほうではなく、どちらかという背の低い先生でした。先生は、進駐軍の通訳か何かをやっておられて、トイレに入ったら、進駐軍のトイレは男子のあれ（便器）が高かったの、「私も高くて苦労した」と言うんです。その後、自分よりも背の低い人が入って来たけれど、その人はどうやってやったんだろうと話されていました(笑)。そういう、面白い先生でした。それで、文学部に行きたいというのはほぼ決まったと思います。

北口 大学に入る時に、推薦はありましたか。

井坂 はい。第一工業高校ではおそらく、枠が10人くらいだと思います。

小林 少ないですね。

井坂 当時は、もちろん全入ではありませんでしたし、工業高校は、一高、二高、女子高よりもおそらく推薦枠が少なかったと思いますね。

小林 1学年、どのくらいの数でしたか。

井坂 最初は170人というのは記憶しています。

高柳 狭き門ですね。

井坂 ただし、2年、3年と進級するたびにだいぶ減ってきましたね。

小林 落第して、減るんですか？

井坂 はい。たくさん入ってきて、減っていきます。2年、3年頃になると変わりませんが、1年の時には相当多かったような気がします。

2. 学生時代

<学生生活>

北口 学部生時代は、いかがでしたか。事前に伺ったお話だと、英語の授業が面白かったの文学部に入学したというお話でしたが、学部生時代に面白かった先生はいらっしゃいましたか。

井坂 今でもOB会がありますが、学生時代は、やはりサークルが印象深いですね。英米文学研究会に入っていて、授業が終わってそこに行くと、先輩が聖書やアメリカ文学、イギリス文学とか、いろんな授業をやってくれました。

北口 一日中、英語漬けの学生生活という感じでしたか。

井坂 そうですね。英語については、工業学校では英語の授業が少なかったの、最初は、今はなくなった学生ホールで辞書をずいぶん引きました。これも、先ほど話した飲食店の主人が、学校に来ればあとはもう自由にさせてくれて、まったく拘束がないものですから、できるだけ遅くまで学生ホールにいました。あとはサークルに行って友達と交流しました。

小林 ワンダーフォーゲルもこの頃からでしたか。山登りはまだしていませんでしたか？

井坂 それはまだです。ハイキング程度は、サークルでやりましたけど。でもやはり、学生時

代の友達づきあいというのは楽しかったです。

北口 それもずっと後まで、それこそ同人誌を作ったり、いろいろな活動が続いていらっしやるわけですね。

井坂 そうですね。壁がなくて、何でも話せるんです。

小林 利害関係もないですね。

井坂 そうですね。加えて、卒業した後は同じような仕事をしている人がほとんどいませんから。今の学生にとっても、学生時代の友人関係というのは、この後ずっと続きますから、その時はわからないですけど、後で大事だったというのがわかります。

小林 今のコロナ時代に、学生時代を約2年間なくしてしまった子たちは可哀相ですね。

井坂 そうですね。今の就職活動は2年生頃から始まりますからね。私の学生の頃の就職活動は今ほどではなかったですが、授業を抜けることが多かったです。4年生になると就職活動も忙しいですね。ただ、私の頃は、就職部に行って求人票を見てもあまり知った会社がないから、「もうやめた」という感じでした(笑)。

小林 最初からもう大学院に行こうと思っていたというより、一応就職部には行って求人票をご覧になりましたか。

井坂 はい。ただ、行きたい会社ありませんでしたね。

北口 どういった会社を希望されていましたか。

井坂 やはり出版関係ですね。出版関係の会社を模索している時に、先輩関係の繋がりから、『文藝春秋』や『主婦の友』の編集長に会ったりしました。あとは、谷川徹三先生のお弟子さんで、村松仙太郎さんという、第二教養部(二教)

で哲学と英語を教えていた先生がいらっしやいました。その先生の授業に出て知っているものですから、友達が「おい、井坂、村松先生がおまえのことを言ってるぞ」なんていって、それで先生の家に行ったことがあります。そして、何か話したら先生に、「それならば日本エディタースクールというのがあるので、そこに行つてごらんさい」と言われて、3ヵ月通いました。当時、日本エディタースクールでは、岩波書店で出版に関係した人やイギリスの詩人のT. E. ヒューム(トーマス・アーネスト・ヒューム)という人の詩を翻訳した長谷川鉦平先生が教えていました。エディタースクールではその先生からは教わりませんでした。大宅壮一のお弟子さんたちが講師陣でおられまして、やはり面白い授業がありました。

小林 そういったご経験は、先生が評論をお書きになることとつながりましたか。

井坂 そうですね。授業では、インタビューの仕方や裏話も聞けました。例えば、インタビューは対等にやりますが、ある点では上から見ないといけないという話とかを聞きました。松下電器の社長にインタビューした時の話では、インタビューをやっていたけれども、他の人に聞いたらまったく違った評価で、神様だと思われた松下幸之助が、お妻さんを何人も持っていて、地元の大阪ではとても評判が悪いとか(笑)。そういった話をしてくれて、やはり面白い授業が多かったですね。不満も多い学生時代ですけど、そういう変化のある時代でしたね。

<学生運動>

小林 不満も多いというのは、学生運動で邪魔されたことでしょうか。

井坂 ひとつは学生運動ですね。特に、大学院に行ってからもう、4年生の時もそうですけれども、ストライキがけっこうありました。

高柳 だんだん激しくなってくる時代ですよ。ね。

北口 封鎖されている時代ですからね。

井坂 これは後で、私も学生部担当となつてわかったことですが、学生運動は少人数の人が実際には支配していました。また後で、インタビューの中に入れるかわからないですが(笑)、ほんの7、8人しかいないのにもかかわらず、ストライキとして全学を封鎖してしまうんです。そういう時代でした。

北口 大学院生の頃に、授業が受講できなくて先生の家に行ったりした、ということを何かに書いていらっしやったと思いますが、とても勉強どころではないという時代でしたか。

井坂 そうですね。1969(昭和44)年だったでしょうか。東大の安田講堂事件や日大の闘争もその頃にありましたが、法政も全学封鎖がありました。当時、私は院生でしたが、各専攻から学生が集まって、大学院の学友会というのが自治会活動でありました。これはどちらかというとな民青系だと思えますが、民青系として組織されたわけではありませんでしたので、民青系の学生と喧嘩したりしました。ただ、全共闘の連中が封鎖していて、学友会の活動家に脅しをかけるんです。一度、封鎖が解かれて大学院棟に入った時に、殺人リストがありまして個人名が書いてありました。「次はやるぞ」と。

小林 「おまえを狙ってるぞ」ということですか。

井坂 本当に殺すということですか。

北口 学生の名前ですか。

井坂 学生の名前、院生の名前です。

小林 セクト闘争ですね。

井坂 もうその頃は、少し陰惨気味でしたが、やはり怖いですよ。ね。

高柳 法政はいろいろな事件もありましたよね。

北口 海老原君のリンチ事件とか、その直後ぐらいでしょうか。

井坂 海老原事件が、いつだったでしょうかね。

北口 1970(昭和45)年が海老原君事件ですね。

井坂 そうすると、その少し前ぐらいですかね。海老原事件が起こって、高い柵ができてしまって、この柵を取り払う時も、自分で言うのもおかしいですけど、ずいぶん苦勞がありました。

小林 大きな苦勞があったと思います。『法政大学と戦後五〇年』を読んでいると、どんな学校だろうと思うぐらいです(笑)。

高柳 これは生々しいですよ。ね。

<中国語を学ぶ>

高柳 学部のお話もいろいろ聞いておりますが、この間、第二外国語は中国語だったとおっしゃっていたかと思えます。現在は、中国語は外国語として一般的になりましたが、私が大学に入った1970年代の半ばから後半にはまだマイナー言語という印象がありました。ましてや先生の頃というのは、どのような感じでしたか。中国語を勉強するというのは、本当に少数の特殊な人という感じですか。あるいは、先生はどのような理由で中国語を選ばれたわけですか。

井坂 正確には覚えていないですね。

高柳 選択肢はいくつか、ドイツ語やフランス語、他にも何がありましたか。まだロシア語やスペイン語はありませんでしたか。

井坂 なかったと思います。ドイツ語、フラン

ス語はあったかもしれませんがね。

高柳 普通はドイツ語、フランス語を選びますよね。

井坂 恐らく英語だから、英語圏以外の言語でバランスをとってといった形だったかもしれません。

高柳 やはり少数でしたか。

井坂 あまり多くはなかったですね。

小林 文革（文化大革命）で、「中国って大丈夫？」というようなイメージになっていた時ですか。

高柳 学部の頃だったら、まだだと思います。

井坂 ただ、その前に古典語の授業でギリシャ語、ラテン語を取っていました。

高柳 それは、第二外国語ではないですよ。

井坂 それは第二外国語ではなくて、通常のカリキュラムの中に組み込まれていたものです。

小林 今は哲学科以外の学生は取れませんよね。

井坂 ただ、受講者数が少なくて、最初は3人いましたが、最後は私1人になりました。「ギリシャ語とラテン語、どっちにする？」と言われたので、「ラテン語にしてください」と答えました。

小林 ラテン語は、いろいろなところで使えそうですね。

井坂 そうですね。中国語というのは、そういったバランスだったかもしれませんね。

高柳 中国語で、何か覚えていらっしゃることはありますか。

井坂 「ウォー」——「私は」とかですね。あまりたくさん覚えていません。スーション（四声）については、困りました。ただ、授業で印象的なのは、その頃、略字が激しくなってきた

いたことです。今は、ほとんど類推もできないくらい簡略化されていますが、当時はまだそれほどでもなかったと思います。

小林 大陸ではずっと簡体字が標準だったと思っていました。

井坂 先生は、もちろん中国語の授業は熱心にやっていましたが、政治の話がけっこう多かったですね。当時はソ連と中国は国境線で衝突していたりして仲が悪かったんです。先生が2人いらっしゃいましたが、1人の先生は、「いやあ、仲が悪いけれども、絶対にそれは仲直りしますよ。大丈夫ですよ」なんていう話をしていました。文化大革命の頃だったでしょうかね。

高柳 文化大革命は1966（昭和41）年からですね。

井坂 もう終わり頃かもしれません。中国を見る目というのは、当時は本当にわかりませんでした。

高柳 おそらく、テキストも少ない時代だと思うのですが。

井坂 そうだと思います。海賊版が多くて、ほとんどそれが上海から出ているという話を中国語の先生がされてましたね。

小林 海賊版というのは、小説などの文学作品も含まれますか。

井坂 そうです。文学も、一般の書も含めて、当時は、海賊版が多かったと思います。断片的ですが、そういった話を覚えています。

3. 法政大学の教員になって

高柳 次に、教員になってからの話を伺います。まずは非常勤の兼任、さらに専任になられたのが、70年代に入った頃だと思いますが、当時はどのような雰囲気でしたか。あるいは、

法政大学を学生や院生の立場で見るのと、教員の立場で見るのとでは、違って見えることもあったと思いますが、教員になってのご感想はありますか。

井坂 教員になってからは、一教で英語担当をやっていますから、一方的にそこからいろいろなものを見る状況でした。10月に着任しましたが、定年延長問題で荒れ狂っている真っ最中でした。

高柳 ご自分にはまだ関係ない、先の話ですね。

井坂 65歳から延長を希望する先生方、あるいは65歳に近い先生方、どちらかという年齢の先生方と若手の先生方とが、ほぼ真っ二つに分かれていました。「65歳が定年だから延長はない」という立場、「延長したいならば申し入れれば自動的に延長ができる」という立場、ふたつの立場が極端に対立していて、本当に激しい論争が行なわれました。そういった中で、これは大きな声では言えませんが、中には「じゃあ、名誉教授にしてもらえれば定年延長は諦める」とか、そういった裏話まで聞いたことがありました。ずいぶん汚い世界だと思ったことがありました。

小林 名誉教授になっても、そんなに得なことはないと思いますが。

井坂 今は、テレビを見るとそこら中に名誉教授がいますが、当時は、名誉教授の数が少なかった時代だったと思います。ただ、私もまだ30代に入ったばかりでわかりませんから、「若い先生にも意見を聞いてください」と言われて、「いやあ、私はまだ65歳がどういう状況かわかりませんので、65の定年でやってください」という話をしたら、私のすぐ後ろに教わった先生がいらっしやって、その先生は延長を希望さ

れる立場でしたので、後でまずいことになったなと思いました(笑)。

小林 教えていただいた先生の中には、急に同僚になった先生もいらっしやるんですね。

井坂 そうですね。教養部のほうは所帯が大きく、120人か130人ぐらいいたと思います。教養課程は全て担当するものですから、とても数が多かったんです。

小林 一教と二教、合わせて？

井坂 いえ、二教は30人に満たないくらいで、一教だけで120～130人ぐらいいました。

北口 その中でも英語グループというのは一大派閥でしたか。

井坂 英語は、その中でも30人近くいましたので、いちばん大きい数でした。

北口 英語グループの先生方は、一団となっていましたか。

井坂 わりあいにとまっていた。多少、くすぶりはあって、極端に反乱する先生も、二、三人おられましたが、統率はとれていました。

北口 その頃は、英語グループの中ではどの先生が年上でリーダーのような感じでしたか。

井坂 岡本文生先生というのが長い間、わりあいに統率を担当してくれました。相談に乗ってくれて、調停役も担ってくれました。極端な話をすると、「それは通用しないよ。駄目だよ」と教えてくれたりしました。

小林 ボスというよりも、相談役みたいな感じですね。

井坂 そうですね。だから人事でも、推薦したい人のことをその先生に一言いうと、ある程度、採用の範囲になってくることもありました。ただ、教養部に入ってから内部の事情がたくさんあり過ぎました。やはり使命感がありますの

で、よく教えようとするのは当たり前ですからね。当時は、クラス人数が60人、70人でしたから。

小林 英語で、60人、70人のクラスでしたか。

井坂 ただ、私は学生時代に、170人のクラスでフランス語の授業を受けたことがありました。170人にもなると、教室に入りませんから、大教室が2つか3つほど820番台の教室があって、そこでフランス語の授業をやるんです。そうすると、学生が教室に入りきりませんが、授業をさぼる学生がいて人数がちょうどよくなるんです。ちょうどよくなるはなりません、それをもう大学は見越していました。そういう時代でした。

小林 いわゆる「学籍はあっても教室に席はない」が、まだ続いているんですね。

井坂 そうですね。

高柳 1950年代、1960年代、マスプロ授業の弊害みたいなものがまだ残っていた時代ですね。

井坂 そうですね。そういえば、フランス語の授業を受けた記憶がありますから、第二語学が1つではなくて2つあったかもしれません。

高柳 どちらを一生懸命やったご記憶がありますか。

井坂 長谷川（克彦）先生のフランス語の授業を受けた記憶があります。

北口 事前に少しお話を伺った時に、大学院の試験に中国語が使えないので、フランス語の授業も受けたというお話をされてましたね。

井坂 そうですね。やはり2つ受けているから、もっと本腰を入れないと試験がまずいと思ったんでしょうね。その程度だと思います。フランス語の授業は、なぜ覚えているかという、長

谷川先生は宿題をやってこないとむくれて出て行ってしまおうんです。私の授業ではありませんが、同じようにフランス語を受けていた仲間が、先生が教授室に行ってしまったものだから、月謝を1時間で割って、1時間にいくらになるというのを計算して持って行って、「先生の授業にこれだけ俺たちは払っているんだから、逃げたのはけしからん」と先生に交渉して、先生もやむなく教室に戻ったということがありました。

小林 170人いたら、誰か宿題をやっていそうなものですけどね。

井坂 そうですよ。学生も豪傑なところがありましたから。面白い学生がいたんです。

4. 中村哲総長の時代

高柳 大学院の最後の頃から、あるいは教員になってもしばらく中村哲総長の時代だったと思いますけれども、中村総長の思い出はありますか。

井坂 中村総長としては、やはり学生との団体交渉（団交）ですかね。

高柳 それは、教員の側として参加していたということですよ。

井坂 そうですね。学生の時は、総長の団交には私はもちろん行ったことがありません。教員になってからですが、先程も言いましたように学生というのは、これも具体的にいうと、絶対的な人数は少ないんですが、白ヘルをかぶっている連中が取り仕切っていて、ある程度、団交する前に交渉団が組織されるんですよ。教員側の交渉団は、だいたい教授会の主任クラスで構成されて、下交渉をするんです。あまり極端に暴力事件になったら困りますから、ある程

度、手順を決めた上で、本交渉になります。ただ、途中で総長が逃げたりすることがありますよね。下手をすると逃げられなくなりますから、その手順も考えて団体交渉をやるんです。そういった話は、学生時代に私は聞いてはいましたが、実際に団交に出たことはありませんし、出ても遙か遠くから見るぐらいでした。511 教室あたりでやっけていても遙か遠くから見るだけで、長い間見ているわけでもないし、言っていることもいちいち聞いてもらえませんでした。ただ、教員になってからは、具体的に教員は教授会から何名、何名と動員されます。一応学生の暴力を防ぐための護衛役ですが、ほとんど役に立たないですよ。遠くから遠巻きに見るだけでした。

高柳 先生は温厚だから、そんな体張って総長を防衛するというタイプではないですよ。

小林 学生席からは紙つぶてを投げる者もいたようですね。

井坂 総長も大変でしたよね。紙つぶてが投げられたりして。

高柳 やはりその頃から、町田開発、多摩移転、あるいはそれに関連した教養部の例のタテ・ヨコ問題とかが大きな問題になっていて、そういったことが論争の焦点になっていきますか。

井坂 その少し前までは、ほとんど授業料値上げが論点でした。授業料値上げ反対で、デモなり封鎖が行なわれました。

小林 そういう時代でしたよね。物価も上がっていく時代でした。

井坂 それで、授業料値上げの反対で学生が総長室に乱入して、酷く総長室を荒らしたことがありました。私もその荒らされたところを見ましたけど、酷いものでした。

小林 校内暴力より、もっと前の時代ですね。

井坂 そうですね。ただ、これも法政の事情でした。学問の自由を守るという立場から、警官隊導入はしませんでした。つまり、そこまで被害が大きいと普通は被害届を出して警察が入りますが、それを防いだんです。良いことか悪いことかわかりませんが、それが法政の場合はずっと続きました。それから何年か経って市ヶ谷再開発が出てきましたが、市ヶ谷再開発については、学生はもうすべて、計画白紙撤回を求めていますね。

小林 それは、お金がかかるからですか。

井坂 表向きは、自分たちに相談なしにということでした。もうひとつは、当時、学生会館がありました。その学生会館が壊されるわけです。「三原則六項目」ですかね、11 時以降はキャンパスから出なければいけないとか、そういった規則がありましたが、それを守らずに泊まり込んでいる連中がいました。学生が拠点にしていた学生会館が壊されると、そういったことが全部できなくなってしまうんです。表向きはそんなことは言いませんが、反対の根拠はそれだったと思います。

小林 学生文化の拠点であったのは事実ですよ。

井坂 ただ、それとほとんど時を同じくして多摩移転の話が出ました。第一教養部は、多摩移転そのものに反対ではありませんでした。移転時に 120 名もいる教員の大所帯が分断される可能性があるわけです。当時の理事会は事実上、教養部をなくす方針で教員を補充しない方針を打ち出していたので、教養部は「多摩にばかりお金をかけるのでは困る」と主張しました。また、市ヶ谷もだいぶ老朽化していましたから、

「市ヶ谷に金をもっとかけろ」という、えげつない表現ですが、それに近い言い方をして、「多摩だけにお金をかけるのはけしからん」という叫びを上げました。教養部の立場、特に一教としては、「再開発をどんどん進めろ」という主張でした。

小林 『法政大学と戦後五〇年』を読むと、一教の中には多摩に合流していく人達がいったり、いろいろな人達がいいたと思いますが、英語としてはみんな多摩移転反対、分断されないようにという感じでしたか。

井坂 そうですね。それでも、私がボストンに研究員で行っている時に「ぜひこの学部に来てくれ」、「この学部に来てくれ」という内々の相談がありました。

小林 社会学部や経済学部などからの勧誘でしたか。あるいは「文化科学部」でしょうか？

井坂 経済学部、社会学部ですね。それで、私がボストンにいる時に、一教のある教員から「井坂さんもぜひ行かないか」と誘いが来たことがあります。

小林 引き抜き合戦ですね。

井坂 そうですよ。ね。「なんだか、こんなことで騒いでガタガタしてるぞ」なんて、海の向こうですっかり高みの見物でしたが、帰って来たら、分断が始まったのでそれが辛辣になっていました。ですから、市ヶ谷再開発と多摩移転、教養部の分断という、少しややこしい話です。一教からいうと分断という形ですが、多摩移転する学部としては4年一貫教育という形にするということですからね。

北口 1年生から4年生まで、学部で一貫して教育するということですね。

井坂 「一貫教育」という言葉を使っていたの

で、それも確かにわからないことはないですね。

1、2年生の教養を担当するというのは全国の大学がほとんど同じことで、カリキュラムもほとんど同じで、よく「金太郎飴、金太郎飴」と言っていました。どこを切ってもみんな同じで、ほとんど社会、自然、人文を2科目ずつ取れ、語学は第一、第二語学を必ず取れなどといった、規定がほとんど一律に同じでした。そういう状況でしたね。

5. 研究科紀要・雑誌の創刊

小林 先程評論というふうに申し上げて、いろいろ雑誌を創刊したというお話もありましたが、先生のお書きになったものを読んで、アカデミックなものだけではなく、社会に向けて評論を書いて発信するという雰囲気が強かったのではないかと思いました。

井坂 この前もお話ししましたが、安保の時に総長が「国会に行け」という時代でした。それと、もうひとつは立て看で、過激派の学生がしょっちゅう看板で政権に対する反対をやっていたので、自然に政治に目を向けるような状況があったと思います。内に籠もるのではなくて、外に目を向けるということですね。

北口 先生は大学院の英友会で『テオリア』という雑誌をつくったり、『法政レビュー』という雑誌に寄稿されたり、本当にいろいろな同人誌とか機関誌に関わっていらっしゃいますよね。

井坂 そうですね。これは大学院の時ですけれども、大学側と交渉しました。今でも覚えていますが、経済学部の先生が「君たち、勉強したら論文を書け。論文をちゃんと発表しろ」と言ったのに対して、院生が、「先生、発表しろといっ

でも発表する場所がないじゃないですか」と返しました。当時、経済学部の紀要には学生の論文を載せていませんでした。おそらく、法学部もそうだと思います。それにもかかわらず、学生から学会のお金は取っていました。そういった矛盾を追及されましたが、紀要に学生を入れるかの判断は、おそらく教授会の権限に関わることです。ですから、大学全体としてはできませんでした。それで研究費を出しましょうということになりました。当時、大学院の研究雑誌をつくるということで300万円くらいを、学生が交渉で勝ち取りました。これも、自主管理で、自分たちが決めるということでした。交渉にあたってくれた栢野(晴夫)先生と後で、「君たち、原子力の研究とノミの涙の研究と、どっちがいい研究なのかわかるか」、「そんなことわかりませんよ。どっちも決められない」といった話をしていましたね。

結局、各研究科の専攻を分けると10か11ありましたが、院生の中で研究雑誌をつくったのは、10だったのでしょうか。事によると9かもしれません。そのひとつに公害研究会というのがありました。当時、「公害」という言葉もまだなかった頃で、早稲田大学の院生が来て、公害の話をしてくれました。それで、公害研究会というのを立ち上げて、そこにも研究費を平等に分割して規定をつくりました。もちろん大学にはそれは見てもらうようにしました。おそらく、それは今も院生では続いていると思いますけどね。

小林 大学院全体の紀要がありますね。

井坂 それとは違うものです。大学院全体の紀要は、その後にできたと思います。

小林 それぞれ研究科、専攻ごとに持っている

わけですね。

井坂 そうですね。その頃はそれがありませんでした。交渉しながら、私も「大学側がそんなにいい返事がないなら、私たちが封鎖の中に入る」と言った覚えがあります(笑)。その時、先生がギョッとしていました。今だからそんなことも言えますけどね。

小林 向こうがまた強くなっちゃったら困りますからね(笑)。

井坂 ただ、先生方もやはり大変だったと思います。結局、クラスや学年やひとつの自治会だけに対応するなら何とかやりようがありますが、全学、あるいは全国的な広がりですから、火の消しようがないですよ。

6. 学生運動の時代

北口 世界的に学生運動が盛んになっていた時代ですからね。

井坂 この大学紛争の直後には、辞められた先生がずいぶんおられました。法政を去られたんです。

北口 疲れてしまったのでしょうか。

井坂 そうですね。学生に対する不満もありますが、今度は教授会の中の不満みたいなものもありました。先ほどいった村松先生は「教師がだらしない」と、内部批判をしていましたね。学生に対して、強行なのか柔軟なのか知りませんが、「教師がだらしない。もっとちゃんと対応すべきだ」という一方で、内部批判として、「こんな場所はいられない」といって辞めたそうです。何人もおられましたね。

小林 疲れてしまうだけではなくて、思想的に相容れないこともあるということですね。全国的にそうだとはいえ、やはり総長の「国会に行

け」という言葉や学生の雰囲気もあったと思いますが、教員の目がそれに反発してアカデミズムの中に向いてしまうのではなく、外に向いていくというのは、法政の特徴でしょうか。

井坂 そうですね。先生方にもいろいろな方がおられまして、例えば山屋（三郎）先生は、学生が来て、「授業なんかやっている時じゃないんだ」と演説をすると、「出て行きなさい」といってコテンパンにやっつけていました。それは藤田という学生で、一生懸命に運動をやったんでしょけれども、その後、いつの間にか学生としていなくなりました。ですから、先生としても頑として言うことを聞かない先生もずいぶんおられたんです。政治で荒れていると、「いや、私はプロ野球のジャイアンツ戦を聞いているよ」とおっしゃる先生もいました（笑）。

北口 そういう先生もいらっしゃったんですね。この時代は、法政の中では学生運動が大変だった一方で、野球がとても強かった時代だったと。体育会は学生運動に全く関係しない、体育会免除のような感じで蚊帳の外だったので、逆に、スポーツに集中できて成績が上がったみたいなことを言う方もいましたね。

井坂 学生にとっては、ひとつの捌け口としてあったのかもしれませんが。ただ、体育会も学生会館学生連盟というのがありまして、そこが自治会費をみんな牛耳っていました。そうすると、学生連盟の言うことを聞かないと予算が下りてきません。ですから、体育会の学生も封鎖の時は嫌でも参加しなければいけないという縛りがありました。

小林 支配が利いていたんですね。

井坂 だから、学生の内部を分析すると、サークルや体育会、学術団体は必ずしも賛成ではな

いとしても、学生連盟に入っていないと、大学が下ろす補助金がもらえないから、やむを得ず参加することが起きていました。それで当然、不満が起こるわけです。その中で特に過激になる対象は白ヘル、それから大学です。大学はなぜ敵になるかというと、大学が荒れないために、大学と白ヘルはそれなりに通じているところがありました。これは本当に、当時の大学の執行部を内部から暴くようなことになるのであまり言えませんが、とにかく大学の執行部、大学の理事会で決定したことが即、学生とかに伝わってしまうんです。

北口 そういったルートがあるわけですね。

井坂 たまらないですよ。先生方も知らないのにもかかわらず、それが学生に伝わってしまうんです。会議に出た時にはもう伝わってしまっているので、盗聴しているんじゃないかと。

北口 それは、執行部に対して不信感が出ますね。

井坂 それなりに一般学生の代表、黒ヘルを被っている連中は、ある程度大学と白ヘルがつながっているということをやはり知っていたと思います。ですから、大学にも、過激派にも「何をやっているんだ」と言う形で立ち上がりますが、4年くらい経つとまたテロが怖くてキャンパスから追い出されてしまう。また4年くらい経つと同じように盛り上がり、やはり追い出されてしまう。それが4年ごとに来るんです。面白い話ですよ。こういう話は知らない人が多いと思います。学生部の中と学生部を担当した先生方のごく少数が内部を知っているんです。

小林 警察を入れないために、いろいろな取引がありましたか。

井坂 そうですね。これもあからさまに言えませんが、中核派の人数は少ないですが、当時、池袋に本拠地があって、そこから指令で来るものですから、学校の中だけでは収まりませんでした。

高柳 池袋にあった前進社でしたか。

井坂 池袋から移って、深川にもありましたよね。

北口 先生自身もヘルメットを被ったことはありますか。

井坂 いや、ヘルメットはないですね。

北口 ゲバ棒を持ったことはありますか。

井坂 それはありません。あくまでも文書口頭です。ただ、殺人リストが出た、その前後にこういう文書を全共闘側に書いたことがあります。一方的に学友会、大学院の自治会を責めるものですから、その答えとして、「そうではなくてちゃんと中に入ってやらなきゃ駄目だ。外で吠えても駄目なんだ。ちゃんと中に入ってやれ」という文書を書いて送ったら、向こうは何も言って来なかったです。だから、私も気持ちはいきり立っていたと思います（笑）。

7. 新法政と全法政

高柳 先ほどの多摩移転の問題で、『法政大学と戦後五〇年』（282-284頁）にも、これまでの教職員組合が日本共産党系だとする柄谷行人名によるビラ「学生諸君へ訴える」が載っていましたが、やはりそういうようなこれまでの全法政が日共系だというあたりが、ひとつの批判の元になっているわけですか。

井坂 はっきりそうだと思います。日共系というと、これはシンパというか、必ずしも全部が日共でなくても、当時は教職員もかなりそうい

うシンパの方がたくさんいました。これは理事になってからはっきりわかったことですが、学生会館の中に相当数の自動販売機があって、1年間で売上が5,000万くらいありました。利益がどのくらいか知りませんが、その5,000万の売上がどこに行ったのかがよくわかりませんでした。学生の中の報告にも入っていないので、一体どこに行っているのかと思いました。OBの方が食堂の中に入っていましたから、OB組織も多少、関連しているんじゃないかと思いました。一方で、学生部や一般の学務課で使っているコピー機のコピー代ですね。コピー機がずいぶんありまして、学校の中の生協が、紙を持って来て、1枚10円でやっていました。大学はみんなその10円を払っていましたが、その利益は一体どこへ行ったのか分かりませんでした。生協が吸い上げているんじゃないかと。

そうすると、一方では学生会館の中の自動販売機、一方では学校の中のコピー機。学校の中の自動販売機も当時は100円で、町の中でやっているのと同じ値段でした。学校の中は学生のために福祉をやらなければならないのにもかかわらず、「なんで100円なんだ」という話が出ていました。不公平ですね。一方では学生会館を支持した過激派が利益を持って行って、一方ではコピー機に代表される利益を持っていく。両方とも利益を持っていつている、そういう構図が当然、頭に浮かぶわけです。これは、全法政と対立する時に新法政ができたという、直接的な切っ掛けではないですが、そういった二重構造をある程度わかっていた先生もいたと思います。

ですから、そういう過激派に反対する立場の人達が、警官が入らないようにするために被害

を受けても届けない、その構造の根本がどこにあるかというのは気づいたかもしれません。学問の自由、その根本に何があるかと。今でも教養部の議論の中でははっきり覚えています、柄谷行人もはっきり「あんたたちは誰に指導されているんだ。言え」と。「あの、あの、あの……」と答えたら、「あのとはなんだ」と、激しい議論がありました。「外から何か指令されてやっているのか」と。必ずしもそうではないと思いますが、全法政も当然そういうのに支配されているという考え方ですから。そこから新法政ができましたが、新法政は職員の方も参加したと思います。

小林 最大どのくらいの人数でしたか。

井坂 一教の大半は入ったと思いますが、職員の方はそんなに多くはないと思います。

小林 150人ぐらいでしょうか？

井坂 そうですね。

高柳 逆にいうと、一教以外の学部の先生はあまりいないということですね。

井坂 ほとんどいませんでした。教員としてはほとんど一教だけだったと思います。やはり大きな流れは全法政でした。賃上げの要求とかで、きちんと働いていましたからね。長い間頼っていた組合ですから、そう簡単には新法政になびきませんでした。

小林 法政は組合が最大4つあったというのを耳にしたことがあります、都市伝説でしょうか。全法政、新法政の他にも何かあったとか。

井坂 第一職員組合ができて活動していました。もう一つは自由教職員組合のことでしょうか。

高柳 確かに、『法政大学と戦後五〇年』の1297頁に新法政の執行部経験者の写真が載っ

ていますが、みんな一教の先生方のお若い写真ですよ。

井坂 一教だけだったかもしれないですね。一教は、多摩移転が出て来て教養課程をどうするかというので、学則の中にも「教養部が1、2年を担当する」とはっきり書いてありました。それをいわば楯にして、一教は、「学則を守れ」という、その一点張りでした。ただし、自分たちの利益だけを主張していいのかということで、勉強会はずいぶんやりました。箱根や山梨のほうに行って泊まりがけで合宿をしました。その時は年寄りの人達は入れないで、どちらかというところ中年以下の教員だけで、「俺たちが何とかしなければ駄目だ」という気持ちで、何とか打開したいと思って、何回か勉強会をしました。そういった中で新法政が出てきたと思います。ですから、不満をぶちまけて組織をつくったわけではないと思います。やはりベターな方法があるんじゃないかというのを探っていました。

小林 柄谷行人は、先生とほぼ同じくらいの世代でいらっしゃいますか。

井坂 そうですね。柄谷行人や渡辺喜之とか。

北口 渡辺先生はこの間、お亡くなりになりました。

井坂 そうですか。知りませんでした。渡辺喜之は、ねちっこいけれどもお酒は飲まないし、でも酒飲みは好きなんです。奇妙な人でした。多摩移転の問題は、後に総長になった増田壽男さんと渡辺喜之と新宿で3人で会って、「喜之、おまえ何が欲しいんだ」なんて、増田さんが言っていました。みんな裏の舞台ですけど、そんなことをやりましたね。わりあいにはっきり物事を言ったけれども、よくわからない人でした。

高柳 私は、一教には所属していませんでした

が、渡辺先生とはよく接点がありました。渡辺先生が定年になってから、駒場の小劇場でバッタリ会ったら、「あれ、君はこういうところに来るのか」と言われました。

井坂 彼は、歌舞伎を小さいときから仕込まれていましたね。

高柳 シェイクスピアや演劇が、好きな方ですよ。

井坂 ですから、市ヶ谷再開発の時も、歌舞伎ができる舞台をつくりたいとおっしゃっていました。

8. 第一教養部の動向

小林 先生が学内のいろんな動きに関わっていかれる最初が、組合の活動でしょうか。

井坂 組合というよりも、海外研修員でポストンから帰ってから、多摩移転が事実上行なわれて、おそらく1年生の授業が行なわれようとしていて、現実に教養部が分断されるのが目の前に迫っていました。それで、英語の研究室主任のときに、教養部が認定しない先生が多摩校舎で教えるというので、押しかけて行って授業を中止させたことがあります。

小林 いわゆる人事権ですね。人事権、カリキュラム権とかいう。

井坂 教養部は、当然のことですから、「よくやってくれた」ということでしたが、そういつたことがあって一教の立場から動いている時に、学部長のことに関わってきました。その頃、教養部で入学試験の採点をボイコットするという動きがありました。

北口 英語の採点をボイコットするということですか。

井坂 教養部ですから、英語だけではなくて全

ての教科に対してです。

高柳 入試ストライキですか。

井坂 ボイコットをするという決定ではなくて、その前の段階でした。もし総長から返事が来なければボイコットするという条件付きでした。ところが、そういう決議をしたということが広がってしまいました。そうすると、これは入学試験ですので、もしボイコットとなってしまうたら大変なことになりますが、これはしなくて済みました。

高柳 『法政大学と戦後五〇年』を見ると、マスコミでも報じられたんですよ。

井坂 はい。中島時哉が学部長で、ほとんど深夜遅くなるまで教授会を開いていました。ストライキはもちろんやりませんでした。

小林 今だと、入試でストをしようとは思いつかばないですよ。

高柳 「前代未聞の入試ジャック」というサブタイトルですから。

北口 入学生がいないと大学としてもお金が入ってこないし、どうにもならないですよ。

井坂 第一教養部はストライキをやったのでしょうか。その後でやったかもしれませんね。

小林 授業に対してですか。

井坂 そうです。それで学生が驚いて、「先生がストライキというのはなんだろう」と（笑）。入試ボイコットではなくて、授業ボイコットです。

北口 確かに1988（昭和63）年頃にはストライキ、授業放棄と。

高柳 その時の文書が、先程の柄谷行人の文書ですね。

井坂 これもだから、「総長、理事会からきちんと返事を出せ、出さないからやるんだ」という、それははっきりしていましたね。

北口 抗議文を出しているけれども、それに答えてもらえないのでストライキを執行という流れですか。

井坂 そのとおりです。

北口 その経緯があつて新法政ができていくという流れとなるのでしょうか。

高柳 そうですね。

9. 卒業生組織

小林 一教の教授会としての活動と新法政というのは、新法政の発足のほうが遅れるものの、両輪のように両方で動いている感じですか。

井坂 新法政の力はそれほど大きくないと思います。ただ一教だけが騒いでいるようなところがありましたから。これは全法政には、嫌な感じですよ。それに、職員の方のごく少数の人が加わっていました。部長の中島時哉さんはつわものでしたが、ちょうどその頃学部長で、一教の議論をある程度、統率していました。けれども、評議員会かなんかで明らかに右翼系の評議員と、仲良しまではいかないとしてもツーカーになってしまったところがありました。それで少し雲行きが怪しくなりました。右翼と結託するなんていうのはとんでもないことですから、一教としても大学に対する反対はあるけれども、そのあたりはきちんとわきまえて行動していて、新法政もそれほど鋭くは活動しなかったと思います。

小林 むしろ、評議員会に右翼がいること自体、なぜそうなったのかと疑問に思います。

井坂 そうですね。法政と右翼は長い歴史があつて、何年か前に亡くなりましたが、安藤昇というヤクザの親分みたいな人がいました。

高柳 ヤクザ映画で有名な人ですね。

井坂 彼が法政のOBでした。先ほどからの新法政の不満と同じように、学内が何となく代々木系に支配されていることが、OB会や卒業生の中ではだいぶ浸透していて、法政が由々しき状態になっているとっていたのですね。今の校友会のずっと前ですが、卒業生組織の校友会が大学を訴えて、法政大学が起訴されて裁判闘争となりました。

高柳 安藤昇も関係しているんですか。

井坂 いやいや、安藤昇はずっと前です。ただ、右翼的な人というのは、影は小さくても今でもいるんじゃないですかね。法政の卒業生が右翼でも左翼でも構いませんが、学校にまで騒ぎを起こすというのはけしからんと思います。ですから、その時から評議員会というのは大事だと、改めて思いました。

小林 卒業生が外から入って来ていろいろな意見を言えるのが評議員会なんですね。

北口 校友会はいろいろな問題を起こしていますね。

小林 グラウンドの一件が、何年のことでしたか？

井坂 それが出てきたのが、ちょうどその騒ぎの後ですよ。佐藤（恒男）という校友理事が熊谷組から7億円もらったということで、毎日新聞に「6大学の名門、法政大学でこんな不正が行なわれている」というニュアンスの記事が掲載されましたね。

高柳 その記事も『法政大学と戦後五〇年』に出ていましたよね。

北口 先生は、先生でもあるけれども校友でもあるので、どちらの気持ちもわかる立場でいらっしゃるんですよね。

井坂 そうですね。

小林 文学部の同窓会の立ち上げは、比較的最近でしたか。

井坂 昔からある学部の中でいちばん最後でした。というのは、ひとつは学科がそれぞれある程度、卒業生組織みたいなものを持っていて、学会的ですからね。それで卒業生が集まる場所というのはありますから、全体として同窓会をつくる必要性がなかったんでしょう。工学部は前からありましたが、社会学部、経済学部、法学部、経営学部が次々に同窓会をつくって、昔からある学部でないのは文学部だけだということで、それである意味で慌ててつくったと思います。

小林 2000（平成12）年前後ですか。

井坂 そうですね。ちょうど2000（平成12）年でしょうか。

小林 先生はその時、理事を終わられたぐらいですか。

高柳 理事は1993（平成5）年から1996（平成8）年ですね。

井坂 私の理事の時は、その前からの問題をずっと引きずってしましてね。タテ割り問題がくすぶってましたから。

10. 阿利莫二総長の時代

高柳 ある意味、阿利（莫二）総長というのは、いろいろな積弊を正常化する、そういった人心一新、新スタートする総長ですよ。

井坂 そうだと思います。阿利総長は、お人柄からいっても「俺はやる」というような人ではなくて、やむなく口説かれてやることになりました。

高柳 『法政大学と戦後五〇年』には、阿利先生は学会では有名でしたが、学内的には知名度

がなかったと書いてありました。

井坂 その通りだと思います。

高柳 それを説得するために藤田省三が他学部に一所懸命に説明してそれで理解を得た、みたいなことが書いてあって、「ああ、そうなのか」と私は驚きました。阿利先生というと、例の学徒出陣で亡くなった方に事後的に卒業証を渡したことが思い浮かびます。もちろんそれは自分も学徒出陣で行って、フィリピンで九死に一生を得たということもあるでしょうけれども、素晴らしいなと思っていました。それだからこそ「俺が、俺が」みたいなことではなくて、本当に頼まれて担ぎ出されたみたいなことでしょうか。

井坂 そうですね。学生が全学封鎖というか、ストライキに入りますよね。その時に先生方が動員されて、阿利さんが門のところに立っている時に私もそばにいたことがあります。また、全法政なんかで賃上げと一緒に闘争したことがあります。教養部の先生とも親しい関係で、温厚な方でした。ですから、全法政とも親しい先生だったと思います。

高柳 抜擢したという意味でいうと、ある意味その先生が同じく温厚な井坂先生に声を掛けたというような感じもありますか。

井坂 私が理事になった時は、教養部は120人もいる教員組織ですから、票数が大きいので、理事選挙や総長選挙では他の学部が相談に来たり、協力を申し入れにきていました。それで、一教からは理事として金丸（十三男）さんという人が何期もやっていましたが、金丸さんが辞めてからは、教養部から理事候補を出しても、当選を目指すのではなくて他の候補の妨害をする目的で（笑）、つまり当て馬になってい

ることが多くありました。そういった状況の中で、1989（平成元）年か、1991（平成3）年ですかね。私が学部長をやっている時でしたが、学部長の任期が終わる時に、中島時哉さんが理事候補になりました。しかし、中島さんが、先程言った右翼系の人とつながりがあるということがある程度わかってきていて、新法政が第一職員組合の中の職員の方が反対しました。それで、中島さんから私に電話が掛かってきて、「いやあ、井坂さん、私は駄目らしいよ」と。私は中島さんの後に学部長をやったものですから、「井坂さん、悪いけど立ってくれないか」と言われました。どのみち妨害するための駒ですから、当選する見通しもないということで、「まあ、それじゃあしょうがないね」と思ってお受けしました。そうしたら、当選してしまいました（笑）。

高柳 予想外でしたか。

井坂 予想外ですね。法学部だか他の学部もけっこう入れたらいいです。そのあたりは私もわかりません。

小林 好奇心で伺いますが、妨害したかった候補というのはどなたでしょうか。

井坂 旧理事です。反対していた理事がまた立候補していました。

小林 タテ・ヨコ問題や多摩移転で反対派の理事ですか。

井坂 そうです。

北口 あの頃の理事といえば、山本弘文先生がいらっしやいますよね。

井坂 山本弘文先生やその前の増島宏先生には一教は猛反対していました。それと同じ、理事会を構成した他の理事も当然、退ける立場でしたので、おそらく私が立候補することになりま

した。

小林 一人というよりは、反対派をできるだけ押し退けようという思惑でしょうか。

井坂 そういう魂胆だったと思います。

小林 法学部が入れたというのも、反多摩が理由なのかもしれないですかね。

井坂 というよりも、何とか混乱を避けたいという気持ちが強かったのかもしれないですね。実は、法学部は、反多摩をあまり鮮明にしていませんでした。経営と一教が反対していました。

北口 下森（定）先生のヒアリングの時に、法学部は上から争いを見ていたみたいなお話を伺いました。「自分たちはこっちに残るので、皆さんどうぞ」のような感じで、多摩の移転の話なんて、そんなに法学部の教授会で問題にならなかったと言っていましたね。

井坂 そうです。

小林 1、2年生の教養は任せておけばいいし、タテでやりたいという気持ちもないしという。

北口 「経済と社会が出て行くならどうぞ」みたいな感じだったそうです。

井坂 そうでした。ですから、多摩の教養がどうなっても、今の一教から遊離していただいだけから市ヶ谷は関係ないと。多摩移転に反対したのは経営ですが、タテ・ヨコ問題になると経営も口をつぐんでいました。だから、理事になった時に、鬼塚（豊吉）さんにも「何もコミットしないじゃないか。知らん顔じゃないか。困る」と文句を言ったことがあります。

小林 確かに、タテ・ヨコ問題になるとそうになってしまうんでしょうね。

井坂 「どうぞ、勝手にしてくれ」といった気持ちだったのではないのでしょうか。

高柳 飯田泰三先生がお書きになったのかもし

れませんが、『法政大学と戦後五〇年』の書き方ですと、やはり阿利総長が出てくる背景として、多摩に経済と社会が行って一教とタテ・ヨコ問題でぶつかっている現状がある。そこは違う学部からでないこの混乱は收拾できないということで、法学部は幸い、その2つに対して特に利害関係がないので、タテ・ヨコ問題の当事者でない法学部から総長を立てたといった話がありますね。

11. 法政懇話会

高柳 その前の、懇話会の時は阿利先生から直接電話が掛かってきたとおっしゃっていましたよね。

井坂 懇話会の時は、私は一教部長でしたから。これは1989（平成元）年の12月頃だったと思います。1990（平成2）年になってからかもしれないませんが、総長から電話がありました。校友理事の不祥事が生じて、もう部長たちはみんな知っているのに、何とかしなければいけないが、卒業生組織は大学と直接関係ない組織だから、何とか卒業生である先生方が努力してくれないかと。私や法学部の金子（征史）さんに電話が掛かってきたと思います。それで、卒業生の教員が集まりました。4人か5人集まったと思いますね。しかし、4人、5人で集まって卒業生組織に何かやることは、少し無理でしょう。ましてや、他の問題がいろいろと重なっていますからね。そこで、他の先生にも呼びかけようということになり、他の学部の有志の目ばしい人に声を掛けました。文学部、法学部、経営学部からも来てもらって、それで懇話会というのをつくりました。

従って、懇話会はタテ・ヨコ問題を直接議論

することは実際には無理です。それでも、何とか法政をいい方向に向けたいという気持ちでした。いま記憶しているのは、懇話会で実りある議論をしたのはやはり入試改革でしたね。もともと入試は、一教がほとんど担当していました。それを、一教だけでは駄目だということで、他の専門学部の先生方も入って、それで共同で入試委員会というのをつくっていましたが、やはり専門学部の先生方は遠慮がちですね。教養部のほうは、英語でも、他の科目もほとんど一教の人が出しますから。それで、やはり入試問題は教養部あたりが動かなければ駄目ですが、同時に専門学部も動かないと入試というのは動きにくいんです。入試というのが大きな問題になっていて、議論の結果、実りあるものになったと思います。

特に、「あしなが入試（学費免除学生特別入試）」の原形なんかは、その法政懇話会でできたと思います。あとは、地方入試もそうですね。地方入試は立命館大学も始めようとしていて、法政や立命館がいちばん早かったと思います。

小林 話が少し戻りますが、法政懇話会は阿利総長がつくるぞと決めてつくられたというよりも、先生方が「卒業生としてよくするのに何とかしてくれ」と言われて、声を掛けられた人達で立ち上げたという感じでしょうか。

井坂 そうです。総長の影響は全く掛かっていなかったですね。

12. 新学部の設置に向けて

高柳 1980年代あたり、井坂先生が教養部長になったり、あるいはその後、阿利総長の下で理事になったりする1990年代の前の1980年代の大きな問題というと、まさに町田開発、多

摩移転、それに教養部がタテ・ヨコ問題でどう絡んでいくのかということがあると思います。もうひとつ大きな問題として新学部の設置がありました。新学部の設置の申請が何回も出てきては、撤回したり、潰されたり、『法政大学と戦後五〇年』を読むだけでも非常に複雑で、なかなか我々の頭の中でもきちんと理解できないというか、本当に何度も何度もあつてという話だと思います。先生が細かい話をするととても長くなってしまいますが、今から見て、自分なりにこの問題はこう理解しているとか、こういうふうに考えればいいとか、何かございますか。

井坂 論点ははっきりしていました。新学部をつくること。第一教養部が主張したのは、常にL字型であること。つまり教養は今まで通り担当すること、しかし専門学部をつくるということです。それも教養部中心の、これは東大に原形がありますが、そうするとさらに大きくなるわけです。それを何とかうまくできないかということで、タテ・ヨコの問題は例えば多摩のほうがタテになって、市ヶ谷のほうには1学部つくって、市ヶ谷をLにするというようなところまで話は進んだと思います。ところが、それはやはりうまくいきませんでした。

高柳 「文化科学部」とか「文化学部」とか、いろいろな名前はありましたよね。

井坂 はい。2つか3つぐらいあったと思います。教養部がやはりヨコを主張する限り、難しかったと思います。

高柳 例えば、「文化科学部」の時はむしろ一教の英語の先生が反対して、それで結局は文部省も、学内で対立があるからには駄目だということになりましたよね。

井坂 そうです。

高柳 理事の中でも一致していなければ駄目だとなり、結局、取り下げることになりました。

小林 多摩に行くことが駄目だったのでしょうか。

井坂 新しい学部をつくるとなると、おそらく多摩に行かなければならなかったんです。ただ、その場合に教養部はどうなるかというのは、常に問題になりますよね。

小林 分断されてしまうことになってしまうと。

井坂 そうですね。地理的に分断ということがありますね。

高柳 確か、最初の頃は多摩に新学部1つ、既設学部2つとか、そういった話がありましたよね。

井坂 多摩に1つ学部をつくると、ちょうど学生数としては経営的に成り立ちますが、2学部では少し経営が成り立たないと。1学部を多摩につくりたいということが常にありました。その場合、教養部は、物理的に分断されますからね。そのあたりの新学部をつくる話は、私はまったくノータッチで、時々、話を聞いていただけで、中身は全く知りません。

小林 先生自身は経済学部とか社会学部からは勧誘を受けたということですが、新学部のほうから勧誘とか取り込み活動はありませんでしたか。

井坂 一切ありません。

北口 次回、井坂先生にもう一度、常務理事の話をお伺いしたいと思います。

高柳 そうですね。今日いろいろお聞きしましたけれども、もう一度整理して、あるいは、一教の教養部長のあたりも含めて伺いたいと思

ます。

小林 私がお聞きしたいと思っていたのは、タクラマカン砂漠調査やウズベキスタンとの関わりに関することです。わりと大学としてのアイデンティティというか、法政大学らしきみたいものが関わった事業なのかもしれないと、少し思いましたが、いかがでしょうか。

井坂 教授会主任をやっている時に、ワンダーフォーゲル部の部長を引き受けてくれないかと文学部の小谷（洋一）先生から私に声が掛かりました。主任の時はタテ・ヨコ問題で忙しくて仕方がなかったのですが、顧問ですので、事故があった時には関与するけれども、それほど忙しいとは思わなかったので引き受けました。監督もいますからね。引き受けた後に、中国の科学院から法政にタクラマカン砂漠の調査をやらないかという話がありました。法政の卒業生でワンゲルのOBで日本山岳会の理事がいて、法政でやらないかという話をワンゲルに持ってきました。私は、監督もいることだし、監督が判断してくれるだろうと思っていましたが、実際に監督とともに、日本山岳会の人と中国の科学院の人と2回か3回会っているうち、とても大きなことだということがわかってきました。費用も試算で、2,000万、3,000万、4,000万、5,000万近くかかるということでした。そこで、監督と相談して、「これはとてもワンゲルだけではできないよ」ということで、断ろうというところまで持っていったところ、監督が「文学部の三井（嘉都夫）先生にぜひ相談したい」と。監督はどういうつもりであったか知りませんが、文学部出身の大関（保）さんという山歩きの好きなワンゲルのOBがいて、それもあって三井先生に相談しようと言ったんです。

三井先生のところに行きましたら、小寺（浩二）さんが当時、助手でいまして、話を聞いた後で、「こんないい話を返すことはないから、何とかやりませんか」となって、やることになりました。そのかわり、みんなで協力しようとなって、私は一教から中島（成久）とか岳（真也）とか兼任講師とか、同僚を誘いました。あと文学部からは特に地理、考古の小倉（淳一）君とか。高柳 小倉君というのが、あの小倉先生ですよ。

井坂 はい。あとは文学部から地理学科の人がね。ワンゲルの人は、けっこう地理が多かったですね。学部の地理学科の人もけっこう加わって、だいたい20人ぐらいで行くことになりました。

小林 ナショナリズムがとか、シベリアがとか、もともとそっちのモチベーションではなくて、結果としていろんなことでリベラリズムに関わられたのであって、もともとは純粹に。

井坂 後でつながりをもってね。初めは何のつながりもありませんでした。

小林 むしろ、つながっていったんですね。

井坂 ただ、ワンゲルに関与してからは、教室で接する学生とはまったくまた違うものですから、「こんなに違うものか」と思いました。新歓合宿なんかを一緒にやると、やっぱり親しくなるんです。

高柳 では次回、そのへんも含めてお話を伺います。今日は、長時間にわたってどうもありがとうございました。

（第1回終了）

井坂義雄元常務理事オーラル・ヒストリー

第2回

開催日 2022年9月6日(水)

場所 法政大学一口坂校舎2階広報課会議室

出席者 井坂 義雄(法政大学元常務理事)

高柳 俊男(法政大学国際文化学部教授)

小林ふみ子(法政大学文学部教授)

北口 由望(法政大学HOSEIミュージアム学芸員*当時)

目次

13. 教授会の執行部

14. 第一教養部の部長に就任

15. 阿利総長時代の理事選挙

16. タテ・ヨコ問題

17. 多摩キャンパスと市ヶ谷キャンパス

18. 第一教養部長時代の人事問題

19. 理事選挙に立候補

20. 常務理事時代：学生担当

21. 常務理事時代：入試制度の改革

22. 常務理事時代：通信教育部における取組

み

23. 常務理事時代：市ヶ谷再開発

24. 下森定総長の時代

25. 国際文化学部の設置

26. 国際交流

27. これからの法政大学に向けて

13. 教授会の執行部

高柳 今日とは2回目ということで、時期的には一教の部長からさらに理事になるあたり、1990(平成2)年ぐらいからお話を伺えたらと思っております。前回のところで補足される

ことや言い残したことなどはございますか。

井坂 特にありません。

高柳 では早速、一教の部長の話に入っていきたいと思います。部局によって、学部長や部長の選出はルールがあったり、時期によって違ったりということもあるかと思いますが、井坂先生の場合は部長になる前も、いわゆる執行部として入っていたことがおありですか。

井坂 はい、あります。

高柳 それは、何という肩書ですか。主任ですか。

井坂 教授会の執行部は3人で構成されました。

高柳 今だと学部長、教授会主任、副主任という形が多いですね。

井坂 そうですね。副主任になったのが、就任からあまり経たないうちでした。

高柳 だいたいそうですね。副主任というのは、どちらかというとまだ若い、就任数年ぐらいでやることが多いですね。

井坂 そうですね。これが案外きつくて、先生方の動員をかける時に、先生方に電話したりするわけですが、当時の状況からすると、実労働

で重い仕事でした。主任になるのは少し後でしたが、主任になると教授会全体のこともある程度、把握できました。

高柳 一教だと人数が多いので、今だったらメーリングリストでメールを送ればすぐに周知できますが、当時は、やはり電話連絡になるわけですか。

井坂 悪くいえばタコツボのような、研究室がありまして、これが人文科学、自然科学、社会科学、それから語学のほうがまた分かれています。そういうタコツボのどこかに電話をすると連絡がつくようになってはいました。

高柳 そこへ連絡すると、次の方へつながっていくという形だったのでしょうか。

井坂 そうですね。特に電話はそんなにきついとは思いませんでした。教授会で決めたことは、だいたい連絡事項で伝わりますから。教授会はそのかわり、けっこう忙しい会になりました。

高柳 基本的に執行部は、立候補ではなくて根回しみたいなのがあって、それで選挙で投票するという感じでしょうか。

井坂 そうです。根回しのある場合とない場合があるかもしれませんが、選挙です。

高柳 主任も副主任も、それから部長も全部選挙ですか。

井坂 主任の場合は、部長が選んで交渉しました。

高柳 副主任もですか。

井坂 そうですね。副主任も、もちろん部長がお願いしました。私の経験では、主任の選挙はあまりありませんが内々の交渉をして主任になってくれた人が「選挙をしてくれ」とおっしゃって、選挙をしました。

高柳 そんな「選挙をしてくれ」と言われても、

規程に則ってやるというのが組織のルールですので、そういったことは普通はできないですよ。ね。

井坂 ただ、厳しい時代で、部長でもほとんど1年交代が多かったんです。

小林 任期は2年ですが、1年で交代になってしまうんですか。

井坂 1年で交代するケースが多かったです。

小林 どうしてでしょうか。

井坂 やはり、専門学部とかいろいろな問題があったからだと思います。

高柳 大変で、もうこれ以上、自分ではできないということですか。

井坂 そうですね。とてももたないと、疲れてしまうんです。

小林 ご本人が辞めてしまうわけですね。

井坂 私も2年やりましたが、2年目もやっとこれで終わりになると思ったら、1月に入ってからまた大きな問題が起きてしまって、なかなか楽にならないという考えを持ちましたね。

小林 当時は、語学や分科会といった、派閥のようなものはありましたか。

井坂 それはあまりないです。学校全体の問題や他学部の問題もタテ・ヨコの問題がない限りそれほどでもありませんでしたが、やはり大きな問題がいつも出ましたね。

小林 例えば、どんな問題がありましたか？一教だと、学生問題ではないのでしょうか。

井坂 なぜか、第一教養部の自治会はありませんでした。ですから、学生問題はほとんどありませんでした。ただ、人事問題などが微妙に生じていました。例えば、一教の政治を担当している先生が法学部に行く時に、「従来は、法学部に了承を受けてから正式に決まるんだ」と法

学部から苦情が来しました。これについては、部長間で「事情が事情なので、申し訳ない」ということになりました。

14. 第一教養部の部長に就任

高柳 一教の部長になられる時は、やはり副主任も、主任も経験しているので、次はもう井坂先生だという感じで、暗黙の了解、もしくは根回しがあって、すんなりと決まりましたか。ご自身もそのつもりでいて、周りもそういうことで、誰か対立の人がいて決選投票ということではなくて、決まりましたか。

井坂 「じゃあ、やりましょう」と内々の返事をすれば、投票はありましたが、ほとんど問題なく決まりましたね。

高柳 先生の時もそういった感じで決まったわけですか。

井坂 そうでしたね。

高柳 年表を見ると、1990（平成2年）年5月と書いてありますよね。通常だと4月から翌年3月までなので、どうして年表で5月になっているのか不思議ですね。つまり、何か問題があって、1ヵ月遅れたとか、そういった事情はありましたか。

井坂 そういったことは感じませんでしたね。

北口 井坂先生が理事に立候補された時の主要経歴を拝見したところ、「1990年5月、教養部長」と書いてありましたので、これを踏襲して5月という認識でいました。

井坂 一教部長は、たぶん4月だと思いますが、常務になる時は選挙があったので、5月からだだったと思います。

北口 理事と総長は5月からですが、学部長は年度始めからだだと思います。

高柳 そうですよ。前の年度のうちに決まっているので、4月1日からが通常ですよ。

井坂 一教部長は、特に問題なく4月だったように記憶しています。

高柳 では、5月からということにあまり深い意味はないわけですね。先ほどのお話ですと、部長は選挙、部長が主任や副主任を自分で決めるということであれば、どなたを選んで執行部体制を組まれましたか。

井坂 主任は、お願いすると断られることが多かったんです。それで、2人目か3人目でやっと口説き落としました。フランス語の先生でしたが「主任の選挙をして欲しい」とおっしゃられて。

高柳 そんなことを言った人は誰でしょう（笑）。

北口 断られることが多かったというのは、やはり大変だからですか。

井坂 それもありますね。私が部長になる時には、もうタテ・ヨコとか多摩移転の問題が中心問題になっていました。これ自体が大変な問題でして、私の前の部長の時には確か私学会館、今のアルカディアで多摩の学部長複数と一教の部長も入って、5～6時間交渉しました。私も主任でしたので「控えておいてくれ」と言われて、控えていたことがあります。

高柳 前の部長というのは、どなたになるわけですか。

井坂 阪上（脩）さんだと思います。

高柳 フランス語の？

井坂 そうです。

高柳 一緒に国際文化学部に来ましたよね。

井坂 そうですね。

北口 阪上先生の前が、中島時哉先生でしょう

か。

井坂 そうだと思います。阪上部長の時には私が主任でした。その後、「部長をやってくれないか」という内々のお話がありました。

高柳 当時の一教の学部長はほとんど2年間ですが、一教の中で大変だったこと、よく覚えていることはありますか。

井坂 学部長会議で激論を交わしたことが、いちばん印象にあります。法政の学部長会議は灰皿が飛んだというような歴史があるぐらい喧嘩腰でした（笑）。

高柳 そういった話は聞きますよね。私が2013（平成25）年度に学部長になった時も、「昔に比べたらだいぶ静かになったんだよ。昔はこんなものじゃなかったんだから」といったことをよく聞かされました。

井坂 そうですね。私の学部長時代も、険しい議論はずいぶんありました。とにかく、学部長会議で決まったことは教授会に持ち帰りますが、その時に教授会に反対されたら立場がなくなってしまうですからね。ですから、後ろに教授会が控えているということを常に考えて発言しなければいけませんでした。

北口 百何十人が後ろにいると考えた上で。

井坂 そうです。やはりタテ・ヨコの問題、社会学部・経済学部との対立が激しかったので。

高柳 学部長会議での激論というと、やはりタテ・ヨコ問題ですか。

井坂 そうです。多摩移転と絡んでいますからね。

北口 移転してから6年ぐらい経っていますが議論は続いていたんですね。

井坂 移転はもう既成事実になっていますが、やはり人事権で、カリキュラムがそのまま残っ

ていますからね。ひとつの例としては、前回の議事録というのを必ず配って修正したりしますが、前回の議事録を閲覧している時に当時の社会学部長が、「一教部長の発言したところが、同じことを2度繰り返しているから削除してくれ」と言ったんです。「いや、話したことは事実なんだから、同じようなことを喋っているからといって削除する必要はないでしょう」と。その時に私は、「一教の言っていることはなかなか聞いてもらえないから、たぶん駄目でしょうけど」というのを付け加えました。そうしたら、当時の法学部長で一教から移られた岡村（忠夫）先生が、「いや、そんなことはありませんよ。私は一教部長に賛成しますよ」とおっしゃって、それから、経営学部長もまた同じようなことを言って、「消すとは何事だ」と怒鳴り出しました。何かその時は孤独じゃないと救われた思いがしました。

小林 当時、一教から法学部とかほかの学部に移るということはよくあったことでしたか。

井坂 たまにありましたね。一教から文学部に異動した例としては、英語の黒川（欣映）先生、泉谷（治）先生ですね。法学部のケースもありましたが、他にはそれほど例は知りません。

高柳 『法政大学と戦後五〇年』だと、井坂先生の前任が中島時哉部長になっていますね。

井坂 そうかもしれません。

小林 「三月に三年半もその職にあった中島時哉一教部長は辞意を表明し、四月の教授会で井坂義雄が次期部長に選出され、五月一日に着任」（『法政大学と戦後五〇年』763頁）とありますね。

高柳 中島さんが任期満了ではなくて辞意を表明して、4月で決まって5月からとありますの

で、やはり5月からは異例なんですね。

15. 阿利総長時代の理事選挙

井坂 当時の状況が少し蘇ってきました。中島部長の時は、もうこれは大変で、教授会自体が荒れるのではなくて、当時の大学の執行部に対する不満が爆発していました。執行部が一教を廃止する方向で、縦割り理論で進めてきましたから、怒り心頭で、深夜まで教授会を開いたことがありました。

小林 阿利（莫二）総長時代ですね。

井坂 そうですね。阿利総長は、一教が賛成しました。青木（宗也）総長はのらりくらりで、一教はいつも頭に来ていましたね(笑)。そして、青木総長が辞任されて、大学の執行部も辞任された時に、選挙があつて、その時に、総長は阿利さんが当選しました。けれども、一教の反対する常務理事が2人もまた当選したので、またすぐ選挙のやり直しがあつたと思います。

小林 選挙がやり直しになるほどの反対ですか。

井坂 選挙のやり直しというか、あまり時間が経たないうちにありました。やり直しとは違うかもしれません。

小林 誰だろう。

北口 阿利先生の1期の時は、飯沼（一男）、下川（浩一）、山本弘文が常務理事ですね。

井坂 その時に、やはり反対運動がありました。

小林 経済学部の方とかでしょうか？

井坂 そうですね。増島（宏）先生も。

北口 増島先生がちょうど変わったということですよ。

井坂 山本弘文はそのまま？

北口 はい、そのままです。

井坂 山本弘文、増島、この2人の常務理事に一教は反対しましたが、山本弘文さんが再度、選出されて、これは許せないと。

北口 理事会の人員を変えたはずが、山本弘文先生が残ってしまったということですね。

井坂 そうですね。阿利さんは支持している関係もあつて、再度、選挙した時には阿利さんが当選された。

小林 そんなにすぐに再度、選挙をすることがあり得るんですね。

井坂 少なくとも短期間に起こりましたね。それほど、当時の教授会は荒れたというか、逆にいうと暴れ者だったから、仕方なかったのかもしれない。

北口 けれども、一教の百何十人を敵に回すと、相当怖い気がします。母体としては最大の人数を誇っているわけですよ。

井坂 今考えると、やはり教授会がある程度、発言力を強くしたのは、学生運動の影響が強く、それに対して教授会が対応せざるを得ないような状況だったということがあるかもしれません。基本的には、教授会が各自治会に対応し、動員されるのも全部、教員ですからね。ですから、教授会に頼らざるを得ないようなところがあつて、教授会の発言が非常に重要視されたと思います。

小林 教授会で反対が起こったら、聞かざるを得ないんですね。

井坂 そうですね。話が少し飛びますが、そのあたりのことは評議員会の中ではなかなか理解されなくて、まったくそういう関係がわからないんですよ。教授会がなぜそんなに発言力があつたのか、仕組みがわからないんです。

高柳 『法政大学と戦後五〇年』の、ここです

よね。井坂先生の顔写真も入って、第一教養部の部長の時のことが数ページにわたって書かれています。例えば川崎グラウンド売却に絡む疑惑事件や「教学問題研究フォーラム」なども書かれています（761-766頁）、思い出すことはございますか。

井坂 川崎の問題は、まさに校友理事の不正問題が直結しましたね。それがもとで熊谷組からお金を7億円もらったという件を、毎日新聞が報道していました。「教学問題フォーラム」のほうは、やはり一教なりに何かできないかということでやったと思いますが、私はそちらにはあまりエネルギーを割けなかったですね。

高柳 入試問題の校正をどこでやるかという、校正場所が問題になったことも書いてあります。

井坂 これは、私が部長の時の話です。例えば、英語の問題をプリントしたものを校正するときに、多摩のほうは「多摩でやりたい」、一教は「とんでもない。市ヶ谷でやるぞ」と言うんです。これもやはり入試の問題で、担当者の問題ですね。

高柳 ここの書き方だと、「解決まで多くの時間と議論を要したが、鋭く対立することなく翌九一年度に現在のようなスタイルになった。」（『法政大学と戦後五〇年』763頁）とあります。

井坂 これも、阿利総長が尽力されて、「何とかならないか」というのでわざわざ私的に懇親会みたいなのをやって、一教のめばしい人と一緒に歓談しながら、何とか懐柔しました。

高柳 総長がそういう場を設定したんですね。

16. タテ・ヨコ問題

井坂 タテ・ヨコ問題で人事の問題がありまし

た。社会学部と一教が人事権で争っている時に、当時、広田（明）先生という、後に現代福祉学部のほうに移られた先生ですが、話し合っているながら一教の了解なしに人事を起こしたというので、一教の資料室で広田先生に電話して、怒鳴り合いをしたことがありました。「何やってんだ、ばか野郎」くらいの激しい言葉を使って怒鳴ったことがありましたね。

高柳 固有名詞は出ていませんが、少し書いてありますね。

井坂 あれだけ話をしているのに、一教に話がなくて人事を起こしたというのでそういったことになりました。それで、話し終わって58年館の廊下を歩いていたら、総長だと思いますが、「どうしたんだ」と心配されて、それから、文学部の英語の榎田啓介さんにも「どうしたの？」と心配されました。非常に大きな声で話していたと思います。あるいは、事務室の方が連絡したのかもしれませんが。

それから、これは少し前ですが、経済学部でもやはり似たようなことが起こって、一教が承認しない兼任の先生を採用して、教壇につかせました。それに気が付いて、これは駄目だということで、多摩の教室に行って「授業をやめてくれ」と話をしました。

北口 学生もいる授業中でしたか。

井坂 授業中でした。これは、経済学部ではなく社会学部でしたね。社会学部の先生がなだれ込んで来て、「やめろ」というので、体に触って、どかそうとするわけです。「これはもう暴力を振るわれた」というので、引き揚げました。小林 やっぱり経済学部とか社会学部は、一教の息のかかっていない人を就かせたいという意向が強かったですか。

井坂 そうです。

小林 タテ・ヨコ問題がそこまで全部、響いてしまっていたんですね。

井坂 そうです。

高柳 『法政大学と戦後五〇年』に書いてありますね。「一教が決めた兼任講師が辞めたので、一教は直ちに専任教員を代講に立てて対応した。ところが社教授会が独自に採用した兼任講師と一教専任教員が同一時限、同一教室でかちあう事態が発生した」(760-761頁)。すごいことですね。先生が2人来て、先生同士が言い争っている。学生たちはどういう反応をしましたか。

井坂 学生はびっくりしますよ。

高柳 サラッと書いてありますが、すごいことですよね。

井坂 そうです。現場はものすごく荒れました。ただ、あまりみつともないことはできませんからね。

高柳 1930年代の法政騒動の伝統を持っているから(笑)。

小林 学生たちもその中で育ちますよね。

井坂 そうですよ。

高柳 学生は、「授業がなくなるからちょうどいいだろう」と思ったかもしれません。

北口 さきほどの入試の問題もそうですが、お互いに常にファイティングポーズを取っていて、何かといたらぶつかる感じだったんですね。

高柳 険悪な感じがしますよね。

井坂 その時は、学部長が中島時哉さんでしたが、学部長にも当然連絡して、それから阿利総長にも連絡がいったと思います。そして、総長の判断だと思いますが、とにかく両方とも兼任

講師は教壇に立たないで、一教の専任の先生が担当するという処置をとることになりました。ですから、私もその時に一回教壇に立ったような気がします。

17. 多摩キャンパスと市ヶ谷キャンパス

小林 先ほどの入試の話で少し思いましたが、今だったら、多摩キャンパスと市ヶ谷キャンパスで、例えば「こうしたい」という入試のことがあれば、職員や入学センターが間に入って双方の意見を調整するという形で、職員の役割が大きいのと思いますが、当時は、職員が調整することはありませんでしたか。

井坂 むしろ職員もお手上げ状態で、手を出せない状態でした。先生方が興奮してやり取りしているので、下手に入ってしまうと火傷をさせていただきます(笑)。

小林 当時は、市ヶ谷に多くの職員がいると思いますが、多摩側のほうには学部事務だけがある感じでしょうか。

井坂 いえ、最初に1年生だけが授業を受けましたね。徐々に職員体制も整ってきていました。

高柳 6年間ぐらい経っていますもんね。

北口 多摩は多摩で、多摩学生部長もつくっていたり、多摩の自治をつくりたいという方向で、成立させようとしていたみたいですね。

井坂 おっしゃるとおりですね。

小林 ですが、例えば入試とかを扱う事務職掌みたいなものは、全部市ヶ谷にあるわけですよ。

井坂 それも問題がありまして、多摩は多摩で全部取り仕切るということ、たぶんこれは教員のほうが主張したのかもしれませんが。事務に

は口が出せないはずです。ところが市ケ谷のほうは、こういう言葉は使いませんが、「あくまでも市ケ谷のほうが本部だ。向こうは出店だ」という、意識が強くありました。ただ、これは多摩の先生方にも同情すると、当時は市ケ谷を全部引き払って、全部多摩に行くという全学移転構想がありました。それがだんだん崩れていって、喧嘩の原因になったのかもしれませんが。全学移転構想が崩れた経緯については知りませんが、これは中村（哲）総長の時（1981<昭和56>年）ですね。総長選挙があった時に、経営学部から総長候補が出まして、その時、一票差か何かで本当に薄氷で中村総長が当選しました。そういう記録は、他にないと思います。

北口 おそらく、今井則義先生と最後に競って。

井坂 そうですね。票数まで載っていないかもしれませんが、これで事実上、理念的には全学移転は無理だとわかったんでしょうね。経済学部とは、質的に兄弟みたいな学部である経営学部は反対していました。そうすると、全学移転はできません。一教ももちろん反対でしたからね。

小林 大きな反対票がそれだけあると、無理なんですね。

井坂 そうですね。当時の社会学部長が「全学移転が崩れちゃって」と嘆いていました。

北口 そこが大きな分かれ目になったんでしょうか。その後、ずっと尾を引くわけですよね。

井坂 そうです。大学事情があったのでね。前にも少し話したかもしれませんが、過激な学生運動が市ケ谷で展開していました。いわば「三原則六項目」を破って、学生会館で寝泊まりしていたという状態でしたので、多摩に移転した経済・社会学部は、そういったものとも縁を切

りたかったんです。私も学部長時代に、「学生会館、何やってるんだ。市ケ谷、何やってるんだ」と、よく酒を飲んでいる時に言われました。手が付けられない、放つたらかしという状態だったんでしょうね。

小林 多摩から見るとそう見えたでしょうね。

井坂 多摩移転の当初、人数は知りませんが、特に経済学部の学生が過激な行動をやっていました。経済の先生方は体を張ってそれを排除したのを私も知っています。そういう学生が連日、キャンパスにいたと思います。

小林 大変な時代ですね。あんな遠くまで行って。

北口 多摩なんて、山みたいなところで、バリケードも何もあったものじゃないみたいな場所ですよ。

井坂 そういうことがありますから、全体を考えるとやはり憎めないといえますかね。理解できないことばかりではありませんでした。

18. 第一教養部長時代の人事問題

高柳 徐々に理事の時代の話にいきたいと思いますが、第一教養部時代の話でもう少しお話しされたいようなことはありますか。

井坂 教授会の時には、本来なら尊敬して大事にしなければいけない同僚の先生方の前で、意見をはねつけたりすることがありました。私が入試担当をやっていた時の話ですが、入試の後にはタクシー券が出ていました。それを出さなかったのは理事になってからと記憶していますが、その時は何かで制限したのか、学部長時代に年寄りの先生から苦情を言われました。「体の具合が悪い時に帰れなかったらどうするんだ」ということを言われましたが、「話になら

ない」というので一蹴しましたね。

小林 それは、理事になられた後ですか。

井坂 一教時代の記憶ですから、教養部長の時に何か制限したと思います。「そんなに無条件にタクシー券を出せない」と。おそらく、そういう条件付けのあとだと思いますけどね。ただ、横浜とか、遠い人がいて、私も東村山のほうですから、8,000円、9,000円はかかってしまいます。ですから、無条件にタクシー券を配るのではなくて、特に遅くなるとか、健康のことも考えて、言われた時に出すようなシステムに変えたと思います。そんなことや先ほどの学部長会議の印象ですよ。

高柳 先ほどの、灰皿が飛ぶような激しい議論の印象ということですか。

井坂 そうですね。阿利総長は、一方に偏ることなく、何とか鎮めようとしている先生でした。私が「決まった、決まったといって話をしないのはけしからん」という主張をいつもしていたものですから、阿利総長は「一教部長もがんばっているんだから、そんなこと言わないで」という発言をよくされていました。

その点では、一教にいた先生で多摩に移籍した、詩人の山本太郎先生が、退職されて、後任の先生を補充するという時に、トラブルが起きました。それで、当時の五味（健吉）学部長（経済学部）と主任、副主任を交えて2回ぐらい、何とか打開の道を探れないだろうかと話合いました。一教としては、一教が常に人事権を主張すれば、いずれ向こうは人事権をとれなくなってしまうので、教員を補充できないまま将来につながってしまうという「立ち枯れ論」という理論がありました。それは当時の阪上部長がそういう発想をされましたが、さすがにそ

れを聞いて、私は「それは無理だ。いくらなんでもそんなことはできないだろう」と思いました。補充できないということは、学部も教員の世界も先細りになってしまいますからね。だから、それは内心、賛成しませんでした。

部長になってから、その件について話ができるだろうと思いました。一教はとにかく人事権を主張しますが、双方で候補を立てて、結果的に経済学部のほうが立てた候補が選ばれば、それでもういいじゃないかというのが腹案にあったものですから、それで話をしたわけですね。「合同の人事委員会を開こう」とか、そこまで提案しました。「これは内々だ。内々でそういうことを取り決めようじゃないか」といったら、五味さんが「内々といっても教授会で承認があるんだから、内々にならないよ」と、後で苦情を言っていました。その時に、自分としてはちょっと誇らしいのか何なのか、変な気持ちでしたね。これで殴り合いをしてもいいからまた話をするというのを約束しようじゃないかと思って、そういうことを、念を押したこともあります。そう言われたら、嫌とは言えませんがね。

それで、五味さんの後に学部長になった伊藤（陽一）さんの時にその話をやろうとしたら、「あれ、その話はもう終わったんじゃないの」と言うから、「いや、そんなことないです」と言ってまた続けました。結果としては、腹案通り、一教も向こうも主張して、そして双方で候補を立てるけれども、多摩が推薦した人が選ばれるという形になりました。その後は、もう一教はなくなりましたからね。そういう一種の妥協ではないですけど、そういうことがありました。これは印象的です。

小林 候補を立てた後は、経済学部教授会で投票する、あるいは一教の人も投票するんですか。

井坂 一教のほうまで投票したとは、ちょっと記憶していません。ただ事実上、一教のほうもそれを了解して、人事権は守られたという立場に立つと。承認しますけれども、投票までしなかったと思います。ですから、そこで双方が折れた感じですか。向こうも、立てた人事でたとえ大丈夫だと思っても、一教にそれを晒すわけですからね。これは守秘義務がありますから、大変なことですよ。一教はその履歴書を全部もらって、教授会で、投票まではしませんが、おそらく閲覧したと思います。これは見えない部分ですよ。

小林 双方の経歴と業績を比べあって、こちらでもよかろうというふうにしたわけですね。

北口 人事とカリキュラムというのは、なかなか難しいところですね。

井坂 そうですね。カリキュラムについては、よく法政のOBや評議員が、「法政はOB教員が少ないじゃないか」と言いますが、カリキュラムと人事というのは微妙なもので、教えられない人を雇ってもしようがないですから、単純な問題ではありません。そういうことで押し返しました。

高柳 先ほど、一教の部長は任期2年間ですが、激務なので1年間で辞めてしまうという話もありました。井坂先生の場合は2年間、最後まで全うされたということによろしいわけですかね。

井坂 そうですね。

高柳 きつかったですか。それとも、それほどでもなかったですか。

井坂 中島さんは3年やったのかな。

高柳 3年半と書いてありますね（『法政大学と戦後五〇年』763頁）。

井坂 それもあつたから、やはり1年で辞めるというわけにもいかない事情もあつたのかも知れません。それに、当時は学部長になりたいという人はいなかったと思います。

高柳 今でもなかなかいませんね。

井坂 口説かれて、仕方がなくやるという感じも無きにしも非ずでしたからね。

高柳 先生の後が、渡辺喜之先生ですか。

井坂 はい、そうです。

高柳 同じ英語でもあるし、「じゃあ、後はお願ひします」みたいな感じで、すんなりと決まりましたか。

井坂 交渉するのは私ではなくて、他の人がやりました。渡辺さんとは、引き継ぎをやりました。

高柳 渡辺先生とは特に何か方針が違うとかはなく、だいたい井坂先生の後を引き継いで、渡辺先生がさらにという感じですか。

井坂 ほとんど一緒に一教の立場を主張していましたから、何も齟齬はありませんでした。ただ、私は10項目以上の申し送り事項を書き込みましたが、それをきちんと守ってくれたかどうかはわかりません（笑）。

高柳 あまり実行されていませんでしたか。

井坂 そういうこともあまり覚えていないですよ。そんなに重要でないことを申し送りに入れたのかもしれない。

19. 理事選挙に立候補

高柳 その後、1992（平成4）年3月で第一教養部の部長が終わって、約1年後、93（平成5）年5月から常務理事ということで、その

時の資料をこちらに用意してくださっていて。
北口 大学の広報（号外 93 号、1993〈平成 5〉年 3 月 9 日）に載ったものですね。

高柳 面白いのは、立候補にあたって「私になったらこういうことをします」ということを箇条書きにされていて、どの方もみんな 5 項目から 8 項目ぐらい書いていますが、井坂先生のところでも 6 項目あります。これを見るとお伺いしたいことがたくさん出てきそうな気がしますが、覚えていますか。

井坂 1 番目に、「阿利総長を支持する」とありますね。それから、2 番目の「設置基準の改定に伴う教学改革の実現」というのは、文部省は 1991（平成 3）年に大学設置基準を改定（いわゆる「大綱化」）したと思いますが、これはほとんどカリキュラムを大学に任せるというか、学校が独自に組めるようなことを目指して改定しましたが、ひとつだけわからなかったのは、教養と専門の先生方の区別は完全に残していました。ですから、教養教員としての採用とか、専門教員としての採用というのは何も手つかずでした。だから、一教の主張というのは、教養教員の採用決定など一教の権限を定めた現行学則を守れというもので、その点については設置基準では手つかずだったようです。ただ、それだけでは駄目だということがあって、専門学部とのことでも教育改革については考えなければいけないということが当然ありましたから、それで 2 番目に入っていると思いますね。

それから、3 番目の「市ヶ谷再開発」は、多摩だけにお金をかけてはけしからんということですね。多摩移転とタテ・ヨコの問題がくっついて、それで市ヶ谷再開発を主張しましたから、鬼塚さん、それから阿利総長と交渉する時でも、

一日でも早く市ヶ谷再開発を始めてくれという話をしたことがあります。それから、4 番目の「校友会」は、不正事件がありましたから、いままでの校友会は汚れているということです。

それから、5 番目の「教員と職員の緊密な連携」、これも当然ですね。女性の登用については、私も理事になってからも総長に言ったことがありますが、なかなかうまくいきませんでした。採用する時に管理職を考慮しないで採用することがひとつの理由と、もうひとつは入試業務で夜遅く、職員の方が夜勤に近いことがよくありました。女性はとても無理だからという、その 2 つが挙げられました。

小林 女性がということを書かれているというのは、やっぱり一教の中で駒尺（喜美）さんや田嶋（陽子）さんたちが活動しているということも影響していますか。

井坂 何かそういう特別なものはないとしても、一教は所帯が大きくて、さっきもタコツボと言いましたけど、わりあいオープンでした。ひとつの例としては、私が就任した時に、一年前に就任した田嶋陽子さんがおまして、就任した時に田嶋さんは先生方にお茶を汲んだらしいんです。そうしたら、当時の常務理事だった金丸（十三男）さんが、「あなたをお茶汲みのために採用したんじゃないよ」と一言いってくれたと田嶋さんが私に話してくれました。わりあいにそういう感じでした。それから、駒尺先生や岡田（秀子）先生とか、女性の先生が当時としてはかなり多かったですね。

小林 田中優子先生も、もういらっしゃる時期ですよ。

井坂 そうですね。女性では、アン・ヘリング先生。それに、まだいたでしょう。今では、そ

んな少ないのかという感じですけども、当時としては多めだったんですね。

小林 他の専門学部のほうは、もっと少ないわけですよ。

井坂 そうですね。法学部では一人とかだったと思います。まあ、文学部は比較的、専門の関係もあって、いたと思いますが、あとはほとんど、いなかったんじゃないでしょうかね。

高柳 今のお茶汲みというのは、どういう場面で誰にお茶を出すということですか。

井坂 ごく普通の会議です。例えば、英語科の会議なんかでね。英語科では20人から25、6人ですから、けっこういますけれども。

高柳 同僚に対してですか。

井坂 同僚です。同僚でも、やっぱりまだ下っ端だと思うから。

高柳 もうちょっと年配の重鎮に対してということですね。

井坂 ただ、男はお茶を出さないですからね。「お茶汲みで採用したんじゃない」と金丸さんは田嶋先生に言ってくれたらしいんです。それを田嶋先生は私に言いました。

小林 やっぱり嬉しかったんですね。

井坂 それがそのままここに反映したかどうかはわかりませんが。

高柳 ある意味、この6番目の「女性や弱者に配慮した」というところに、井坂先生らしさがあるかと思います。今でこそ、大学として、あるいは社会全体で、ダイバーシティといったことはかなり共通理解になってきたと思いますが、この時期だとまだまだそれは弱かっと思います。それを公約に出して立候補するというのは、先生らしいと思って読ませていただきました。

井坂 この政策または抱負は、私一人が考えたことを書いたのではなくて、やはりその時のブレーンがいて、こういうのを入れようかというのをいろいろ勘案しながらのことでした。

高柳 その出馬母体というか、当然一教から推薦されて、一教は組織が大きいので当選もされたと思いますが、例えば阿利先生なんかとは、その前から法政懇話会なんかでも一緒になっていろいろやったりされているわけですよ。阿利先生のほうからも、「どうだ、出てみないか」みたいな話がありましたか。

井坂 まったくありません。それから立候補するときの、特に政策等については一教の中の比較的長老で、ものをよく知っている先生がアドバイザーとして関わっていました。

高柳 やっぱり一教は比較的組織が大きいので、それまでも理事というのは何人も出てきたという感じですか。

井坂 そうですね。それと、けっこう喧嘩腰な年寄りの連中が元気よく喧嘩をやっているという印象がありましたが、それなりに専門学部、他学部の人とも交流がありました。人数はわかりませんが、それぞれ個別に親しい人たちもいたので、学校全体の雰囲気というのはそれなりに把握していたと思います。

小林 ブレーンの方々というのも、一教の中で推してくださった長老の先生方ですか。

井坂 私の頭の中では一人か二人ですが、それほど多くありません。

高柳 お名前を聞いてもよろしいですか。

井坂 自然科学の谷藤（惇）先生と、それから、英語では岡本（文生）先生ですね。あと一人ぐらいいたかもしれませんが、そんなに多くあり

ません。

小林 英語だけではないんですね。

井坂 そうですね。当時、市ケ谷再開発は、学生が「市ケ谷再開発白紙撤回」というのを、キャンパスじゅうに立て看を掲げていました。再開発が困難なことは当然わかっていたんですけどね。

小林 3番目に付属中高が入っているのが、少し興味深いです。例えば、付属中高の教員とのつながりや付属中高が意識にのぼってくるきっかけみたいなものはありますか。

井坂 おそらく法人ですから、全体を包み込むということで、特に付属校が点在している吉祥寺や川崎、鶴見、そういうところを含めての配慮です。

小林 法人としての配慮ということで、特に個人的なことではないということですね。

井坂 そうですね。それともうひとつは、付属校の選挙権の問題があります。

北口 投票できたかどうか。

井坂 投票できたのかもしれないですね。

北口 そこにも目を配っているぞというアピールをしたということですね。

高柳 その投票のことですが『法政大学広報』号外96号、1993(平成5)年3月26日、理事候補者選挙の投票結果を見ると、今とはぜんぜん違いますね。理事選挙って、誰が投票権を持っていましたか。今の数とはまったく違います。例えば、鬼塚さんだったら38.74票と読むわけですか。母数が少なすぎると思います。

小林 一人何票で、0.いくつとか、換算式みたいなのがあったのでしょうか。

北口 裏に一応、総票数みたいなのが書いてありますが、その数字はどういう意味だったので

しょうか。どのように票を数えていましたか。

高柳 小数点2桁まで書いてありますね。

井坂 これは換算した結果です。

高柳 一票の比重が違うんでしょうか。

井坂 そうです。今覚えていますのは、教員が2だとすると、職員が1といった具合でした。

北口 そうしたら、どこかで0.5というのがあるのかもしれないですね。

井坂 ですから、付属校も職員と同じになっているのかもしれないですね。あるいは、付属校の職員はみな本校から行かれていますから、付属校の職員は市ケ谷の職員と同じですし、専任の実験助手もいました。

小林 下2桁があつて、0.5どころではないので、おそらくそこに含まれているのでしょうか。

高柳 立候補する時に、ある程度獲得する票が読めるのではないかと思います。当選間違いないと思っていたのか、あるいは厳しいかなと思っていたのか、どういった感じで選挙に臨まれましたか。

井坂 私は、その票読みには参加していませんね。最初からもう当選しないと思っていましたから。

高柳 そうですか。

井坂 もうまったく、当て馬だと思っていましたからね。

高柳 これだと、最下位ではあるけれども、ちゃんと当選していますね。この差がどのくらいなのか、ぜんぜん意味がよくわかりませんが(笑)。

井坂 これも、そういう比率をちゃんと知っている長老クラスの教員がいて、計算していました。

高柳 今、当て馬というお話がありましたけれど、でも出るからにはやりたいというお気持ち

もあったわけですね。

井坂 立候補ですか。

高柳 周りから推薦されたにしても、ご自身の中で決意して、「理事っていろいろ仕事も大変だけど、やろう」というお気持ちだったのか、逆に「あれっ、嫌だ、なっちゃったよ」といったお気持ちだったのか。

井坂 実際には、「あれ、当選しちゃった」という気持ちでした。それは、中島時哉さんから電話がかかってきて、「俺は駄目らしいよ」ということで、「井坂さん、なってくれよ」というので、「ああ、そうですか。じゃあ、しょうがないね」というので、そういう経緯がありますからね。

高柳 では、どちらかという受け身で、自分からやろうという感じではなかったということですか。

井坂 受け身でした。だから、当選した後に川上（忠雄）さんに会った時に、「まさか井坂さんと一緒に理事に当選するとは思わなかった」と言われました（笑）。だから、本当に人ごとみたいに立候補しました。

高柳 そうでしたか。

小林 女性や弱者に対する公約がよかったのかもしれないですね。

北口 今ここに書かれていたことって、井坂先生が作業部会を担当されていた「21世紀の法政大学」の審議会につながっていくと思いますが、いかがでしょうか。

井坂 そうですね、それはそうかもしれませんね。

北口 市ケ谷再開発とかも含めて、この時の公約が後々に。

井坂 それはあるでしょうね。

20. 常務理事時代：学生担当

高柳 理事を務められた3年間で苦労したことや大変だったこと、いま覚えていらっしゃることはどのようなことがありますか。

井坂 1993（平成5）年4月に理事になって、総長が担当を決めるわけです。内々に伝わってきたのは、私の担当が市ケ谷再開発プロジェクト、学生部、入試、通信教育、国際交流、保健体育ということでした。それで、内々の打診の時に総長に「総長、どうして私がこんなに担当しなきゃいけないんですか」と電話しました。そうしたら、「みんな学生と関係があるから」ということでした。当時は、とにかく、学生が強烈にストライキをやったりしていました。学生が関係していたので、そうならざるを得なかったということですね。

小林 本当は、国際交流とかは学生だけではないんでしょうけどね。

井坂 そうですね。学校ですから、学生が関係しているのは当たり前といえば当たり前ですが、さすがにこれはね。それから1年後ですけど、萩原（達二）さんという監事がおられて、理事室と同じように1室がありました。あまりにも毎日、毎日電気がついていて、家へ帰らないものですから、それだけ見ても忙しいというのがわかって、理事会でそれが問題となりました。それから総長が担当を降ろしてくれました。

北口 途中から市ケ谷再開発の担当が鬼塚先生に代わったというのは、それも要因だったのでしょうか。

井坂 これはそれとは別のことでした。市ケ谷再開発は、鬼塚さんがそれまでずっと、設計から青写真も全部持っていて、施設部経理を担当しておられました。私が5月に担当になった

時にも、鬼塚さんは私に何も資料は渡さないし、ただ担当ただけでした。職員会議や部課長会議で「市ケ谷再開発はどうなっているのか」と聞かれて、「もともと鬼塚さんがやっていたので、私がやるべきじゃなかった」といったことを言ったら、「そんなことを聞いているんじゃない」と言われて怒鳴られたことがあります。

そのうち、総長から「井坂さん、これは学生向けに市ケ谷再開発についてあなたが文書を書くしかないよ」と言われました。それで、夏休みを使って草案をつくりました。その時に「手伝おうか」と言った先生もいましたが、手伝ってもらっても仕方がないし、自分でつくりました。9月の理事会で草案を揉んで、10月に全学生向けに、「市ケ谷再開発について」という文書を、4ページぐらいのものを配布しました。

この時に救われたのが、その時の1年か2年前の鬼塚さんの時代に、学生の白紙撤回運動に備えて「市ケ谷再開発について」という、同じような資料を学生に出していました。学生向けが主な目的ですから、学生部の廊下に置いたところ、学生側がそれをどこかに持って行って、ドブか何かに捨てたか、他の人が見ないように燃やしてしまったらしいんです。すでに大学は1回こういうを出しているのだから、それを基礎にして文書をつくりました。

それで、学生側は「自分たちに相談もなしに再開発というのはけしからん」ということをビラで言っていましたので、何も資料を出さないと話し合いはできないこと、やはり専門家に考えてもらって、キャンパスをよくするための設計図が必要だということ、資料くらいはついたら無責任だということを書き入れました。大学は1回もう出したという前提で出したも

のですから、これがバネになって、10月にそれが配布されて、そこから少し動き出したと私は思っています。

それで、私はその文書が出た段階で、設計図その他、まったく私は持っていませんので、とにかくこれはもう鬼塚さんにやってもらうしかないと思いました。それで、理事会でもそれを利用してもらって、一教にも阿利総長と鬼塚さんと一緒に行って、代わってもらう理由を話して、教授会懇談会でも了承してもらって、それで代わりました。

他の部署の担当を降ろしてもらったのは、就任から1年後です。1年というか、5月ですから11ヵ月ですね。

小林 先ほどたくさんあげられていた中で、その後、降ろしてもらって残った役割は何でしたか。

井坂 学生部、入試、通信教育でした。確かその頃、川上さんが「21世紀の法政大学」を立ち上げようとしていたので、そういうのは協力関係で担当を分担しました。

北口 やはり学生部を担当するというのが、まさに学生担当になるわけですね。

井坂 はい。これは、対学生ですけれども、市ケ谷再開発に直結しますからね。やはり理事時代のいちばん強烈なものは、対学生ですね。

小林 学生全部ではなく、一部の学生ですね。

井坂 そうですね。当時、コンサルト会社があって、鬼塚さんが指揮をとって、大学全体の仕事を少し整理して、無駄を省いて効率化しようとしていました。それでも理事室は全く改善されず、遅くまでいるものですから、秘書課長に苦情を言われたことがあります。当時のブレーンの先生がおられて、学生部のほうは理事室に詰

めて、連日、どうしたらいいのか、計画をしていました。

北口 その頃、学生部長はどこの先生がやっていらしたんですか。

井坂 学生部長はだいたい各学部が交代でやっていました。当時、交代になったかどうかわかりませんが、その頃は交代もうまくいきませんでした。一教の堀上（英紀）先生とかが、やっていたかと思いますが、すぐにまた太田（九二）先生に代わって、それから今度は吉田さんに代わりました。

高柳 ロシア語の吉田衆一さんですか。

井坂 はい。

北口 みなさん一教ですね。

井坂 そうですね。この吉田先生の時から、対学生の対策がずいぶん変わってきました。さきほどブレンと言いましたが、吉田衆一さん、法学部の鈴木佑司さん、文学部の牧野英二さん、この3人はもう侍でした。当時、学生はテロが怖いですから、うっかり手が出せませんでした。鈴木佑司は堂々とキャンパスの中で活動家の学生と立ち話をしていましたからね。それから、吉田衆一さんは自分の家の敷地に招いたりしていました。また、当時は府中寮というのがありました。この府中寮は、結果的には17年間まったく金を大学に払わないで、住み込んでいました。

高柳 自主管理みたいな形でやっていましたよね。

井坂 その寮の自治会と一升瓶を抱えて「学校もちゃんと信頼しろ」と話をしました。それで結果的には、自治会の連中も学校の会議室を使って学校と交渉するようになってきました。牧野さんは牧野さんで、やはり勇ましかったん

です。三人三様で、三人が自立して、すべていろいろな対策をこなしてくれました。そういう先生がいなければもたなかったですね。

北口 先生ご自身に身の危険とかはありませんでしたか。職員の人達の話では、水をぶっかけられたとか、いろいろな攻防戦があったとお聞きしました。

井坂 私が理事に就任した時から理事会で、総長が特に建築関係のところから何かを送られても受け取らないで学校に持ってくるようにしようと、決めました。お歳暮、お中元が来ても、受け取らない。開けたら危ないということもありました。もうひとつは、やはり賄賂になるといけないと思いました。いくつかの建築関係の会社の人は何度となく秘書室に名刺を置いてきました。家にも、「荷物は絶対に駄目だよ」ということにしました。私も1回か2回あったと思います。怖い話ですが、牧野先生は、文学部長をやられていた時に何か自宅に送られて、爆発したことがありました。

21. 常務理事時代：入試制度改革

小林 先ほど、学生部と入試と通信教育部をご担当だったということでしたが、入試で何か変えたところや取り組んだことというのはありますか。

井坂 入試は、前に法政懇話会で、入試改革が実りあるものとしてはひとつあったと言いました。法学部が「あしなが入試」を実施したいということで、理事になって担当理事会が1回か2回開いた時に、鬼塚さんがいきなり理事会で「入試のことはどうなっているんだ」とボンと書類を僕の前に投げたことがありました。つまり、僕が何もしていないということなんで

す。そんな、急に言われたってと思いましたが、すぐにそこから「あしなが入試」を実施するほうに動きました。あと、入試では地方入試の導入がありました。

小林 地方入試の導入というのは、法政は早いほうでしょうか。

井坂 非常に早い方ですね。当時、立命館大学がすでにやっていたと思いますが、それでも1回か2回やったかどうかです。立命館大学が関東のほうに出てきましたので、法政は関西にということで、関西に加えて九州と、東北のほうで1回やったと思います。

小林 それは、受験生獲得というのはもちろんあると思いますが、地方からの進学を促したいという、理念的なものというのものあるわけですか。

井坂 その前に、これも法政懇話会か入試制度委員会かなんかでやったかもしれません。入試制度委員会というのは主任や学部長が出ますからね。多摩移転と関係しますが、多摩移転の時に学生がどこから来たかという調査をやった時に、圧倒的に関東が多いことが分かりました。70～80%が東京都、千葉県、茨城県、神奈川県から来ていました。入試事務部の資料では、やはり偏差値によると都心が強いんです。そういったことが議論になって、特に法学部は全国から有志を集めたい、つまり志のある人を求めたいと言ったと思います。法政は全国型だということ強調していた記憶があります。単なる受験生集めではなくて、地方から優秀な人材を求めたいというのが、地方入試を導入した理由のひとつでした。その後、だいぶ地方出身の学生が増えたと思いますが、その分、本当に大変だと思いますよ。

22. 常務理事時代：通信教育部における取り組み

高柳 通信教育部で何か取り組まれたことはありますか。

井坂 通教生が「オレンジ校友会」という名前の卒業生団体をつくって、設立する時に呼ばれて話をしたことがあります。通教の卒業生も、活動していることがわかったことが、印象的でした。通教もやはり法政では古い歴史を持っていますし、全国でもたぶん1、2番目に古い制度ですが、そういった歴史も担当してわかりました。ですから、「通信教育は卒業生も含めて、法政大学の財産ですよ」という話をしたことがあります。

高柳 確かにそうですね。

井坂 ただ、先生方は通教担当というと、必要コマ数に加えて通教も持つので、余計なものを持たされたみたいで嫌う人が多かったです。ですが、先生方の立場と、通教生が持つ法政にどうか、学んだところに対する熱意みたいなものは、また別にあるんですよ。通信教育だから尚更、学んだ学校については強い絆を感じるのかもしれないと感じました。

小林 最近、通教は若い入学生が多くなっていますが、当時は社会人というか、一定の年齢以上の方が多かった状況でしたか。

井坂 そうですね。私は英語担当ですけども、面接を何回もやりました。

高柳 スクーリングではなくて面接ですか。

井坂 面接は必要でした。スクーリングと面接、両方やりました。

小林 卒業する時にでしょうか。

井坂 そうですね。やはり、英語は苦手な人が多かったですが、一生懸命なんとかクリアしよ

うとしていました。それから、スクーリングの
時にも、通常の学部生の授業よりも熱心な視線
が集まりました。私は参加したことはありません
が、地方のスクーリングがあると、本当に飲
み明かしたりして親しくなったり、そういう関
係もあるらしいですね。

23. 常務理事時代：市ケ谷再開発

小林 理事時代に、他に何か印象深いことはあ
りますか。

井坂 少し戻りますが、やはり市ケ谷再開発の
ことです。再開発にあたり、ボアソナードタ
ワーのところにあった大学院棟を壊す必要があ
りました。担当は鬼塚さんになっていましたが、
この時は大変でした。これは、さっき話した3
人の勇士が遅くまで残って、計画を練りました。
あの日は雪がちらつく日でしたが、夜の10時
過ぎた頃に、我々と全学教職員が、机や椅子を
教室から持ち出してバリケードを築きました。
「我々がこうやってバリケードを築くというの
は、なんか違和感があるな」なんて言っている
先生もおられました、仕方がないですよ。そ
それでバリケードを築いて、業者が入って行っ
て鋼板を設置しました。そうするともう邪魔で
きないですよ。翌日にはもうちゃんと鋼板が
設置されていて、バリケードがなくなっても、
学生が妨害できない。この時は、学生も「完敗
だ」と言ったそうです。そこから市ケ谷再開発
が本当に動き出しました。その時、阿利総長は
病気で倒れていらっしゃっていましたが、倒れ
られる前に「53年館、大学院棟を解体するこ
と自体ができるかどうか、それが心配だ」とよ
くおっしゃっていたので、総長が元気な時にそ
れを知って欲しかったと思います。知ってもら

えたかもしれませんけど。

北口 最後の最後に。

井坂 さきほど10時頃と言いましたが、バリ
ケードを築くことも含めて、学生側に伝わると
いけないから、実は直前まで理事室から情報を
洩らしませんでした。

北口 学生に伝わってしまう可能性があったか
らですか。

井坂 はい。どこかから洩れていく可能性があ
りました。それは、3人の勇士たちも知っているし、
我々の共通の認識でした。その時は、川
上さんにも鬼塚さんにも教えていませんでし
た。それで、始まる1時間ぐらい前になって
から「やはり知らせなければまずい」というこ
とで、知らせて、それで行動に移しました。だ
から、他の理事にも教えませんでした。そうい
うドラマがありました。

小林 349頁（『法政大学と戦後五〇年』）です
ね。「一九九五年三月二五日夕方から」とあり
ます。

井坂 夜中ではなくて。

小林 「夕方から、53年館の周囲に鉄板のフェ
ンスを」とありますが、その前には、「フェン
ス張り工事を可能にするためのバリケード作り
を、学生のいなくなった夕刻から深夜にかけて
行った」とあります。

井坂 翌日かもしれません。学生に妨害されて、
何をされるかわからないから業者が怖がって来
ないんですよ。

小林 「途中、学館から出てきた十数人の学生
による抗議行動があったが、対応した教員との
間の論戦以上の行動に出ることはできなかつ
た」（『法政大学と戦後五〇年』349頁）とあり
ますね。

井坂 そうだと思います。

小林 この計画を立てた牧野先生たち、すごいですね。

井坂 だから、教職員の動員もそうとう多かったですね。

小林 当時の大学教員は大変でしたね。

井坂 その後、学生の妨害もなく進んだと思います。学生会館ができて大学側と学生側が運営について話し合いをする直前に、「暁の突入」と称する反代々木系学生の建物占拠によって、ここが活動家の学生の拠点となり、この建物の外壁に南京大虐殺の壁画を刻むという運動が学外にまで広がっていました。それに地下に食堂を作れという要求が学生会館学生連盟から出されていました。さらにその後、学館喫茶部の再開要求というのがあって、いずれも退けたものの、落ち着くまでにずいぶん長いことかかりましたよ。

それから、大学が決めた重要なことが教職員一般に知らされる前に学生新聞によって報じられるということがしばしば起こっていました。それはおかしいというので、今はたしか名前が変わったはずですが、学生部が『コンパス』という学内ニュースの新聞を発行することになりました。この頃は前に話した3人の侍に加えて、学生部長でもあった経営学部の鈴木武さんの活動が強く印象に残っていますね。

もうひとつ、これは規模としては小さいですが、後の影響は大きいと思います。飲酒で学生が一人亡くなりました。1年生でしたが、佐久間君という学生でした。

高柳 一気飲みとかでしたか。

井坂 そう、まさに一気飲みでした。それまで一気飲みはどこの大学でもやっていたみたいで

すね。

小林 90年代の大学生はやっていましたね。

井坂 他の学校でも犠牲者が出ていましたが、法政でもまさにそれが起こりました。とにかく一気飲みをやって、酔っぱらっているからと思ってベンチに横たわっていたらしいんです。少し酔っているぐらいに思ったらしいんですが、30分くらい経っても起き上がらないので心配したら、もう意識不明みたいになっていたとのことでした。

高柳 急性アルコール中毒ですかね。

井坂 そうだと思います。おそらく隣の通信病院だと思いますが、病院に連れ込んだそうですが、いつ亡くなるかわからないということで、その時は1週間ほど私もホテルに泊まり込んでいました。その後、教え子の結婚式があったので栃木県へ行ったら、式の最中に亡くなったという知らせがあって、途中でキャンパスに戻ったことがありました。それから学生部は飲酒を厳禁ということで、今でもそうなっていると思います。その後も、理事を辞める時にもお母さんと一緒にお墓まで行きました。アルコールは、2年、3年経つと強くなりますが、まだ1年生の頃は弱いらしいんです。

高柳 今まで全く飲んでいない人が、一気に大量に飲んで。

北口 18歳ぐらいですよ。

井坂 そういうのを、ずっと前に通り越している子もいますけどね。

あと、学校のキャンパスの高い柵はもうすでに取られていましたが、やはり1mぐらいの柵がありました。今は外濠校舎になっていますが、あそこに学生会館があって門がありました。ただ、門には常時、中核派の自治会の立て看があっ

て、門を開いたことがありませんでした。立て看は、2枚も3枚もありましたが、それを何とかしようと、要するに我々としては門を開きたかったんです。いかにも立て看があつて門が塞がれていて、イメージが悪いので、できれば全部、塀も取っ払いたいぐらいでした。昔は、近くの若者がよく自由に入り込んで、55年、58年館の屋上でデートしたという話があるくらいですから、自由なキャンパスでした。そのような自由なキャンパスを実現したいということもあつて、あの門を何とか開かなければいけないと思ひました。

それで、学生部補佐という名前が付いていたと思いますが、さきほど話した3人と取り組みました。当時は、吉田さんも学生部長をやつて、それから代わりましたが、やはりそのつながりで学生部補佐になって、その人達と門を開くにはどうしたらいいかと協議しました。学校が立て看を取るというのは、今まであまり例はありませんが、立て看を取つて門を開くためには何をしたらいいか。門を開くということを学校全体の方針にしようじゃないかと。これは当然、理事会だけではなくて教授会のほうにも下りている話です。「門を開くということに合意して欲しい」ということで、その頃は、あまり本気で議論はせずに、報告程度で終わったと思います。学生部が夕方に立て看を取り外して、錠がかかっていましたから、それを切りました。

それでやったら、翌日また閉まって錠がかかっていました。それで、3回か4回ぐらい切つては開くことを繰り返しました。当然、看板も取り外しました。最後は、「この門を開く」と記した小さな立て札を門のところに置きました。これは法的に有効らしく、取り除いてしま

うと、裁判になった時に問題になるらしいです。そこからピタッと立て看がなくなりました。法学部の鈴木佑司さんもいますから、そういう点はみんなチームでした。

小林 それを取り除くとまずいと学生もわかつたんですね。

井坂 学生はむしろ、それを知っているんです。ただ、その前に、立て看を取つたりすると自治会が言ってくるんです。何を言うかと思つたら、最後には「革マルが襲つて来るから、あれを取られたら困る」ということまで言うわけです。そんなことは聞いていられないと言ひましたが、学生会館が見えるからということで、見えないようにというので、掲示板をあそこにくつつか置きました。それでも納得しませんでした。この時は、1週間ぐらいホテルに泊まりましたよ。

高柳 どこに泊まりましたか。

井坂 だいたいフェアモントホテルという、今もありますか。

小林 もうないですよ。九段ですよ。

井坂 はい、千鳥ヶ淵にありました。

小林 10年以上前になくなっていきます。

北口 それこそ、フェアモント事件とか、いろいろな歴史の舞台になったと聞きました。

井坂 そうですね。ずっと前に、学生がフェアモントを襲つたんですよ。ホテルを襲えば当然、警察が入りますからね。法政は騒動の多いところでした。

24. 下森定総長の時代

高柳 理事として、1期3年間ですよ。その3年間の中で、当初は阿利莫二総長ですが、途中で体調を悪くされて総長も代わりますね。下

森（定）さんとの間は、鬼塚理事が総長の代行をしていたわけですか。

井坂 阿利さんが出て来られないというので、選挙まで日がありましたから代行を立てなければいけないということになり、鬼塚さんが代行ということになりました。これも裏話ですが、鬼塚さんは理事を何期もやっていましたから、鬼塚さんが総長になってもおかしくなかったのかもしれませんが、法学部あたりから強い反対が出ました。「鬼塚を総長にするわけにはいかない」という声まで聞こえて、結局、選挙になりました。

高柳 北口さんの作ってくれた年表だと、下森さんと清成（忠男）さんが候補として出たのに、1回投票数不足で総長選挙が不成立となったとありますね。

井坂 そうです。この時は、一教が悪者でしたね。一教が選挙をボイコットしました。渡辺喜之あたりが、おそらく清成を総長にしたいと、「けしからん」と。下森さんを降ろしたいというのが意図にあったような感じですね。

北口 一教は、下森先生よりは清成先生だったということでしょうか。

井坂 清成でした。

小林 どうして、一教は清成派だったんですか。

井坂 私も、そのあたりはぜんぜんわからないです。ただ、下森先生には何か偏見があったんでしょうか。下森さんは、学生部の部長時代に勇名を馳せたことがありますよね。ほとんど一晩、学生に閉じ込められてしまっても、頑張った。

北口 清成さんを担いだしたのは、鬼塚先生でしょうか。

井坂 これもちょっとわかりませんね。でも、鬼塚さんあたりかもしれませんね。

北口 清成さんは理事をやっていないのに、急に総長になられた。

井坂 そうですね。一教が多摩移転をはじめ、いろいろな問題に反対した時に、当時経営学部長をやっていた清成さんが、一教の話聞いてくれたという経緯はあります。特に、渡辺喜之さんあたりはわりあい親しいというか、話ができる関係だったのかもしれませんが。そういった経緯で清成さんだったと思います。きっと微妙なことがあったんでしょう。ただ、一回流れたことがありました。その時、下森さんが鈴木佑司さんに自分が疎んじられたという話をしていましたね。

高柳 任期の途中で総長が変わって、何かやり方が違うとか、やりにくいとか、違和感とか、そういうことは特になかったですか。おおむね阿利さんの路線を下森さんも継ぐという感じでしたか。

井坂 そうですね。下森さんは特に大きな方針を掲げるとか何かではなく、任期の途中もあつたでしょうから、あまり無理にするようなことはなかったと思います。わりあい静かにしておられたような感じがします。

高柳 では、理事としても別に、急に戸惑ったりすることもなく、粛々と進めていくという形でしたか。

井坂 あまりそういうことありませんでした。下森先生というのはそれほど強い印象はなく、むしろ労ってくれるような感じがしました。ただ、その時はもう市ヶ谷再開発が少しずつ進行していく途中でしたので、この後、建築が進むだろうという想定のもと、キャンパスの中にベンチをつくって学生の居心地をよくするとか、そういう配慮を学生部としてもいろいろとしま

した。強烈な印象というのは、下森先生の時にはあまり残っていませんね。

小林 短かったからということもありますか。

井坂 はい。下森先生の時には、川上理事の下にやった「21世紀の法政大学」が、名前を変えた「教学改革本部」ができますからね。私がちょうど理事の最後の時に、一教の解散を含めた「教学改革本部」というのができました。私はもう辞める寸前でしたから関係しませんでした。この時に全学が教学改革に関わるということと、一教も解散するということをはば前提とした、全学の改革意識が高まるというか、始まりました。ですから、私はその時にはもうすでに国際文化学部のほうに関心が移ってしまっていました。先生ももちろんご存じでしょうけれども、国際文化学部の準備教授会が始まったので。

高柳 原鉄ビルでやっていましたよね。

井坂 原鉄ビルの二階でしたね。

高柳 確か2年ぐらい、私は勤務校のある青梅で授業が終わってからこっちに來たりしていました。

井坂 今みたいに、会議室が揃っていませんからね。

高柳 こちらとしては、誰が誰かもよくわからず、井坂先生にもそこで初めてお会いしたはずですけどね。

井坂 準備教授会では、入学した全学生が海外に行くという話（SA = Study Abroad Programs）とか、語学の先生を中心にしてそういう話が進んでいるというのがわかってきて、最初は大丈夫かなと思っていました。

25. 国際文化学部の設置

小林 やはり「国際文化情報学部」という、情報も入った企画が立ち上がったことで一教も解体を納得してという感じでしたか。

井坂 それもありますね。事実上、国際文化学部というのは一教からほとんど行きましたからね。あと、内部事情でやむなくもありましたし、希望する人もいますが、文学部や経営学部、法学部に行った先生もおられましたけど、全体としての人数は少ないです。

小林 分属になった人達というのは、今おっしゃったように「いつかは元に戻るぞ」という感じだったのか、いろいろでしょうか。

井坂 たぶん、教養部の性格からして、文学部に移られる先生方はわりあい希望されて行った先生も多いと想像します。ただ、法学部や経営学部に行った人は、必ずしも専門ではない人がいましたから、そういった人達は内々交渉があったのかもしれませんが。

小林 その後、再びだいたい移籍されましたもんね。

井坂 もうその頃は、そんなに「一教存続」なんて言っていられないという雰囲気もだんだん出てきましたからね。やはり全学が合意すれば何でもできるという、いわば感情も出てきたと思います。

高柳 2003（平成15）年まで一教は存続していましたよね。それこそ一教にいる人は、1999（平成11）年の段階で国際文化学部に移る人もいるし、一教解体の時にまた国際文化学部に来るという人もいたし、あるいはこの話のように、多摩も含めて、市ヶ谷の他の学部に分属した人もいました。先生は初めから国際文化学部に興味をお持ちで、1999（平成11）年の段階で国

際文化学部にもう行くとおっしゃっていましたが、国際文化学部立ち上げと同時に行くという気持ちを、かなり強く持っていましたか。

井坂 自分の意思かどうかは、ちょっと今わかりませんが、まったく問題なく国際文化学部に行くものと思っていました。

高柳 学部長就任予定の川村（湊）先生を中心にやっていましたよね。

井坂 そうですね。おそらく、問い合わせもないから議論の外になっているかもしれません。最初から、そうでした。例えば、渡辺喜之さんが経営学部に行ったというのは、清成さんのこととか、経営学部の人とわりあいに話ができたからなのか、そういう関係も多少あるかもしれません。

高柳 ちょうど学部の立ち上げの1999（平成11）年頃は、先生は在外研究の時期でしたか。

井坂 タシケント、ウズベキスタンに行っていたので、1年目の本当の苦労は知りません。

高柳 海外から見えていたんですね。

北口 日本に戻って来たら新しい学部ができていう状態ですね。

井坂 その点は本当に、高柳先生たちがご苦労されたと思います。

高柳 さきほど小林さんもお話ししたように、もともと「国際文化情報学部」という形で申請しましたが、文部省が「情報は駄目だ。情報教員がこれしかないのにそんなのは駄目だ」ということで、「情報」を取って、「国際文化学部」になった。あの時、ある若い教員で「なんだよ、そんなの詐偽じゃねえかよ。これまで国際文化情報学部って言っていたのに、急に『情報』を降ろすなんて詐偽じゃねえか」って言った元気な人がいて、「誰だろう、この人」と思いました。

結局、後でわかりましたが…。その場にいらっしやいましたか。

井坂 その時にいたかどうかわかりませんが、その記憶はないですね。

高柳 私は、それが非常に強烈な印象として残っています。

井坂 そうでしたか。ただ、「国際文化情報」で取れなかったというのは記憶がありまして、採用を前提とするようなことで、情報の先生にも会ったことがあります。僕は理事を辞めてからそんなことをやったものだから、川上さんに電話で「理事室に来い」とか「来てくれ」とか言われたから、「なにを」というので怒って、会った時に喧嘩したことがあります。むくれたことがあります。情報の先生と会ったことがあります。

高柳 当初、情報教員の枠は1名の予定でしたけど、結局、学部名から「情報」が消えてその先生も就任を辞退して、それで山本（昌弘）先生と大嶋（良明）先生を採りました。山本先生はすでにご退職ですが、今はもう甲（洋介）先生、重定（如彦）先生、和泉（順子）先生も含めて4人いるので、今だったらひょっとしたら「情報」を学部名につけることができるんじゃないかとも思います。

小林 2000（平成12）年設置の情報科学部とバッティングするから駄目だったんでしょうか。

高柳 あと、「情報」を冠するにふさわしい体制かどうかの問題もあったと思います。

井坂 情報の先生というのは、とにかくお金がかかったらしいです。だから、積み上げのお金が違ったし、そういうことがあります。

高柳 今、4人もいるのでけっこうな勢力です。

井坂 下手をすると、差し替えが来ますからね。決めた先生が駄目だということで、その先生を代えられると大変なことです。

小林 設置審（大学設置・学校法人審議会）を通っているわけですからね。

井坂 「この先生は不適だ」ということが、たまにあります。文部省というのは、言葉は丁寧ですが、隠然とした力を持っています。窓口に出るのはお役人だと思いますが、それを審議する委員会がどんな先生方がやっているのか。だいたいみんな学校の先生だと思いますが、きちんと論文を評価できるのかどうかかわからないですよ。ただタイトルだけで判断するのか、論文なんかいちいち細かく読んでいないと思います。そういう不幸な面もあります。

26. 国際交流

高柳 国際文化学部に移籍されてきて、最後、2008（平成20）年度で定年ということは、国際文化学部で10年いらっしやったわけですよ。先生の長い教員人生の最後の締めくくりを国際文化学部で過ごしたというのは、いかがでしたか。SA ボストンのご担当でしたよね。

井坂 そうです。ボストンは、実は理事を辞めた後だと思いますが、何の委員会だったのでしょうか。もうほとんど留学先が決まった時点で、「もうひとつ学校を入れてくれないか」という話をして、当時の議長だった増田（壽男）さんが、「おお、これは異例なことだ」と言いながら受け入れてもらったのが、ボストン大学でした。

高柳 先生の思い出の地ですよ。

井坂 そうですね。自分が在外研究員で行ったこともあります。当時、アメリカの東海岸のほうにはひとつもありませんでした。東と西は

まるで違うので、東部のほうにひとつ学校が入ってもおかしくないよと。

高柳 UC デイビスと、それからシカゴとボストンでしたよね。

井坂 シカゴは後から入ったのかもしれませんがね。

高柳 シカゴは、今やけっこう人気がありますが、確か1年目は数人しかいなくて、最少催行人員にならないということで、希望した人はどこか別のところに割り振られて、初年度は実施できませんでした。

井坂 そうですか。国際交流を担当している理事の時に、学生との交換協定を結んでいたテキサスのベイラー大学から「協定をやめたい。停止したい」という話が来ました。困ったなと思って学部長会議で持ち出したら、当時、黒川先生が文学部の学部長で、「一度、学校間の協定をやめしまうと復活させるのが大変だから、簡単に切らないほうがいい」という話があって、結果的には切らなかったと思います。向こうの言い分は単純です。お互いに学生を交換しようといいながら、法政の学生はある程度、英語を勉強して、たとえ完全でなくても授業を受けるわけですが、向こうから来る学生は、日本語をまったく学んで来ないので、一方通行になってしまうということでした。だから、それから法政ではESOP（交換留学生受入れプログラム）とか交換留学生のための講座を設けるようにして、英語の授業をするようになったと思います。そういうこともありました。ウズベキスタンから帰った年でしょうか、ボストンに行ったのは。高柳 そうでしょうね、2年目ですからね。2年生がSAだから、1999（平成11）年に学部を立ち上げて、2000（平成12）年度に初めて

SAに1期生が行ったわけですね。

井坂 これはやはり印象的でしたね。その後、ボストンには行っていなかったことと、ボストンの事務課の人とも会ったりして、ボストン大学のCELOP (Center for English Language & Orientation Programs) という、事前学習の学校で向こうのスタッフと話をしたことが印象にあります。日系で二世のプロフェッサー・シラカワという先生が、在外研究員の時にずいぶん親しくして、会ったことがありました。その先生を通じてお願いしたものですから、とてもスムーズにいきました。そのCELOPの中では、「どうして法政大学がそんなに優遇されるんだ」と、文句が出たぐらいによくしてくれました。

高柳 先生もご存じかもしれませんが、あの時から英語圏SAもだいぶ変わりました。

井坂 カナダも。

高柳 そうですね。カナダに3校、あるいは、当時イギリスはシェフィールドのみでしたが、もう1校、リーズが入りました。何といても、いちばん希望者の多かったオーストラリアのモナッシュが、どんどん行く人が少なくなってしまって、今はもうモナッシュはありません。こちらの都合もありますが、向こうとしてもそういう制度をやめたみたいです。まもなく、南半球の別の大学との間に協定がスタートすると思います。ここ20年でSA先も変遷があり、協定校がずいぶん変わりましたね。ドイツ、フランス、ロシア、韓国が変わり、むしろ変わっていないほうが少ないくらいです。2020(令和2)年度、2021(令和3)年度はコロナで派遣中止となってしまいました。今年度は行き先ごとに、ここはOK、ここは駄目ということになっ

ています。

井坂 行けなくなった学生は、少しお気の毒ですね。

高柳 今の4年生は全員駄目でしたね。

27. これからの法政大学に向けて

高柳 さて、時間もだいぶ押してしまいましたけれども、締めくくるに際して、何か先生のほうから、この場で言っておきたいこととかございますか。

小林 我々に対してだけではなくて、大学史の資料として残っていくものなので、これからの法政大学に期待することなどはありますか。

井坂 ウズベキスタンの話ですね。ウズベキスタンのタシケント国立東洋学大学から訪問者がいまして、「うちの学生を留学させてくれないか」と言われました。それが実現して、今も学生交換があると思いますが、それで中央アジアとの関係ができたというのはすごく嬉しいことで、それがきっかけで私も在外研究で行くことになりました。

その時の最初の出会いが面白いというか、8月15日に学生部にたむろしていたんです。学生が靖国神社で「靖国参拝反対」とやっていて、靖国神社側から毎年、「何とかやめてくれ」と文句が来ていました。拡声器をビルの後ろに置いて、怒鳴るわけですよ。その対策もあって、学生部長、私、職員の部課長も控えていました。その時にタシケントから先生が来られて、今のような話をされました。その時には、幸いなことに学生部長のロシア語の吉田先生がいて、吉田先生もご存じの方でした。そのときの訪問者は菅野怜子先生とあって、今でも大車輪で活躍しておられるはずです。その後、タシケント国

立東洋学大学から法政に訪問がありました。その時は、向こうの学長と副学長さんが来られて、法政と協約を結ぶことになりました。それが印象的でした。

ですから、タシケントには法政はとても行きやすくなりました。今も学生は、向こうに希望すれば行けると思います。ただ、向こうから法政に来るほうが多いというか、2名ずつですけど毎年来ているみたいで、熱心に日本語を勉強しています。1年から初めて日本語を勉強して、本当によく理解するようになって、2年目で、普通に話ができるようになります。私がタシケントにいた時に、日本に留学するための試験がありました。文部省推薦のほうが少し後で、大学が募集する留学生の試験が少し早かったんです。その時に、法政と外語大しか招く大学がなくて、1学年50何人いるうち、4人が全部「法政に行きたい」という希望でした。何とか調整して、もちろん2名にしたと思いますが、そんなことがありました。

小林 学部の交換留学ですか。

井坂 はい。

小林 ウズベキスタンの学生は、大学院もけっこう受けてくれますよね。

井坂 そうですね。だから、私がタシケントに在外研究で行った時は、向こうの副学長さんが私を呼んで、「教員の交換がないじゃないか」と言われました。でも、最初からそうなっているという話で、実現はしていないですね。ただ、学生が法政に来ると、授業料免除は双方ですが、物価が高いですからウズベキスタンの学生に生活支援をしなければいけません。それで一度、法政に来たウズベキスタンの学生が、日本ウズベキスタン協会に苦情を訴えたことがあって、

それを拾い上げて法政国際交流……今は名前が変わっていますね。

小林 グローバル教育センターですね。

井坂 たぶんその頃、7万円か8万円の補助を出すようにしたと思います。向こうは持って来るのが少ないですから、そうしなければやっていけないですね。国際交流協会が旅費を出して来るわけですから、本人たちはもう本当に現金を持って来られませんからね。生活費の物価でいえば大きな差がありますから、とても向こうから先生を呼ぶのでも平等というわけにいきません。

小林 ゼミ生がウズベキスタンに1年行っていたことがあって、とても痩せて帰って来ました。「どうしたの？」と聞いたら、現地の学生がカツカツの生活をしているから、自分だけ十分に食べることができなくて、と聞いててびっくりしました。2012（平成24）年、13年前後の話です。

井坂 そうですか。学校とは関係ないですが、わかったことは、ウズベキスタンという場所はおおよそ遠隔の地で日本と関係ないと思っていたのが、とんでもないということです。シベリア抑留者でたくさんの建造物を残しているとか、今でもとても親日家が多くて、日本という目の色が変わるくらいです。スターリン時代に、強制的に移住された朝鮮半島出身の方がいっぱいいらっしゃいます。

高柳 ロシアの極東からですよ。

井坂 今も20万人以上おられるんじゃないでしょうか。街を歩いていると、よく「カレー？」と聞かれます。

高柳 コリアですね。

井坂 「いや、ヤポン」と言うと、「おお、おお」

なんて言われたりします。

高柳 私もお隣のカザフスタンに行ったことがあります。バザールなんかでキムチを売っていたりしますね。

井坂 そうですね。レストランとかで朝鮮半島の食堂があります。同じアジアで、とても親しい関係です。朝鮮半島の人達の陰しさはないですね。タシケント国立東洋学大学で日本語講座を——講座という名前だけれども実際には科ですよね。ウズベキスタンがソ連崩壊後に独立して、中央アジア大学というところからタシケント国立東洋学大学に分離しましたが、日本語講座をぜひ開こうというのは、金（キム）さんという朝鮮半島出身の先生でした。その方が強く主張して、「ぜひ日本語をやろう」「日本語をぜひやるべきだ」といって、日本語は最初にできましたが、日本語講座は当初からとても人気があったそうです。朝鮮語は、日本語の後からできました。

金先生の生い立ちを聞くとこれまた大変で、第二次世界大戦の時に朝鮮半島のおそらく今でいうと北朝鮮で、日本語を喋れるという理由で、両親が目の前で銃殺されたそうです。彼はまだ少年でしたから銃殺は免れましたが、そこからソ連のほうに行って、ウズベキスタンに行ったという経歴があるので、日本語は堪能です。そういった悲劇も聞きました。ですから、日本から遠いなんてとんでもありません。

高柳 いろいろな意味で、つながりがありますよね。

井坂 あとひとつ、ウズベキスタンに行くことを決意したのは、国際文化学という学際を何とかしたいという気持ちでした。ウズベキスタンのことを教えるなんていうことはとんでもない

ですが、アメリカというところだけを見るのではなくて、やはり別のところへ視野を拡げて国際文化で何とか新しい分野をつくっていきたいという気持ちでした。

高柳 それはやはりありますよね。私も国際文化学部にいるということで、そうでなかったら意識しないようなことに一歩踏み込んでみるとか、自分でも冒険してみる気持ちになります。

井坂 ありますよね。

高柳 教員の責任というか、学生に「国際社会人になれ」とか言っているのに自分が実践しなかったら、それは申し訳ないですからね。

井坂 当初から先生方はそういう気持ちをもつてすごく強く持っておられて、何とか国際文化というのを学問の分野にできないかという気持ちでしたね。

高柳 新しいところで何もそういうものがないから、自分たちがつくっていくというか、少しでもそれに参考になるようなことを実践したいという思いはありますよね。

井坂 その流れとして、いま国際文化学会というのが全国にありますが、これをいち早く提唱して今も参加されているのは、熊田（泰章）先生や川村先生です。とても人材がたくさんいて、若手がわりあいに多くて、全国的な学会になっています。国際文化というのは、いずれ放っておくと消えていくだろうという危機感があって、何とか活かして拡げていかなければいけません。

高柳 今日は長時間にわたって、貴重なお話をたくさん聞かせていただきました。本当にありがとうございました。

井坂 どうもありがとうございました。

（第2回終了）